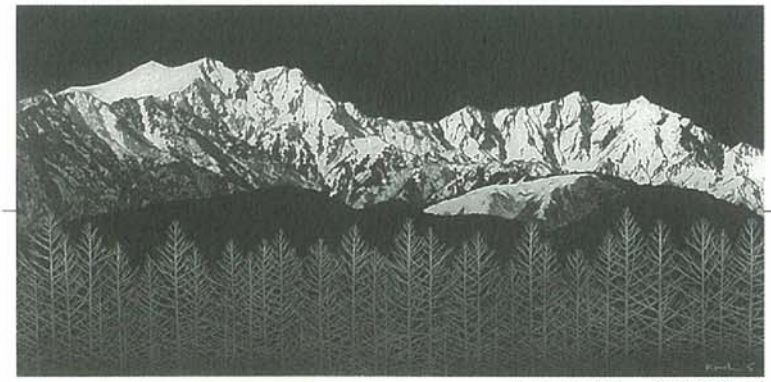
「内閣府（総理府・総務庁）青年国際交流事業」50年記念

地球人で行こう！

～信州から見つめる 明日のEARTH～

- 青少年国際交流事業事後活動推進大会
- 日本青年国際交流機構第24回全国大会
- 第15回青少年国際交流全国大会フォーラム



～からまつ林～ （画）齋藤 清

長野大会 報告書

- 平成20年11月29日（土）～30日（日）
- 会 場　立山プリンスホテル（長野県大町市）
- 主 催

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）
日本青年国際交流機構
（財）青少年国際交流推進センター
長野県青年国際交流機構

CONTENTS

大会要綱 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 02
ご挨拶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 03
大会日程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 08
開会式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 09
分科会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
基調講演 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
懇親会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
二次会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
日本青年国際交流機構表彰 ・・・・・・・・・・ 29
帰国報告会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
事後活動報告会 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
参加者交流会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
閉会式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
東京チャーター便・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
大会記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
大会報道 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
参加者アンケート ・・・・・・・・・・・・・・・ 45
参加者からのことば・・・・・・・・・・・・・・・ 47
長野大会のコンセプトなど ・・・・・・・・・・ 48
大会までの流れ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
大会参加者 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
ご協賛いただいた会社・商品のご紹介・・・・・ 52
スタッフ名簿 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
あとがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

大会要綱

「内閣府（総理府・総務庁）青年国際交流事業」50年記念

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第２４回全国大会
第１５回青少年国際交流全国大会フォーラム
長野大会開催要綱

１．目　的：　内閣府、地方公共団体等の行う青少年国際交流事業の既参加青年が集まり、地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、全国的な事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行い、既参加青年相互の交流と研さんを図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するとともに、国際交流活動を一般の方にも紹介していくことを目的とする。

２．主　催：　内閣府政策統括官（共生社会政策担当）
日本青年国際交流機構
財団法人青少年国際交流推進センター
長野県青年国際交流機構

３．後　援：　長野県　長野県教育委員会　大町市

４．主　管：　日本青年国際交流機構第24回全国大会長野大会実行委員会

５．期　日：　平成２０年１１月２９日（土）～３０日（日）

６．大会テーマ：　地球人で行こう！～信州から見つめる明日のＥＡＲＴＨ～

７．会　場：　立山プリンスホテル
〒398-0001　長野県大町市大町温泉郷　TEL　0261-22-5131

８．対象者：　内閣府、地方公共団体などが実施した青少年国際交流事業の既参加青年
国際交流事業に関心のある方

９．参加費：

宿泊者	大　人	15,000円	（中学生以上）
	小学生	10,000円	
	未就学児	3,000円	
	乳幼児	無料	
	非宿泊者	5,000円	

明日への期待を込めて

地球人で行こう！～信州から見つめる明日のＥＡＲＴＨ～

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付
国際担当参事官　田中　愛智朗

長野における本大会の成功を改めて嬉しく思いますとともに、今後の活動への期待を込めて報告書に寄せる言葉といたします。

「地球人で行こう！～信州から見つめる明日のＥＡＲＴＨ～」の大会スローガンのもとに「環境」をテーマにして開催した本大会は、時代にあった切り口で未来を考える場として成果を収めることができたと捉えています。

菊地俊朗氏の「山の社会学」と題しての基調講演は、人と自然の関係を認識させてくれる素晴らしい内容であり、様々なことを気づかせていただいたのではないでしょうか。また、長野らしい自然と人々との交流を中心にした分科会は、それぞれに個性豊かな特色があり、楽しく満足感を得られた時間であったと思います。懇談会での盛り上がりは、国際交流事業の既参加者の集まりらしく、事業も世代も地域も越えた気持ちの熱さを表したものであると感じました。二日目の活動報告会は、機材の不調というハプニングもなんのその、各地で活動に取り組む様々な事業経験者のパワーと意欲を知らせてくれた有意義な時間でした。

今後、大会参加者の皆さまが、これらの企画で得られた成果を生かして、社会に貢献できる多彩な活動に取り組まれることを期待するとともに、内閣府青年国際事業担当者としてより有意義な事業の実施に取り組んでまいりたいと気持ちを新たにしています。

最後に、こうした素晴らしい場を作り上げてくださった田口実行委員長並びに樋口会長を始めとする長野県青年国際交流機構の関係者の皆さま、後援をいただいた長野県、長野県教育委員会、大町市、そして大会に御協力いただいた多くの方々に敬意を表しますとともに深く感謝を申し上げます。

満足度たっぷりの長野全国大会

日本青年国際交流機構会長　大河原友子

北アルプスのふもと長野県大町市にて第２４回全国大会が開催されました。

開会式は見る側をワクワクさせるパネルシアターで始まり、国際交流の大切なメッセージをユニークな手法で発信してくれました。

～地元の自然と人にふれあおう～とした環境をテーマにした８つの分科会は、信州をより良く理解するのに大変役立ちました。

懇親会ではキャンドルを手渡され、美しい歌声に引き寄せられてステージの方へ進むとアカペラグループによるロマンチックなオープニング！その後、会話と食事を楽しんでいるうちに今度はアフリカンミュージック！老若男女合わせ事業に参加した当時の乗りで、参加者全員が一体化し最高に盛り上りました。

２次会は日本全国各地から持参した自慢の品に日本津々浦々まであるIYEOのネットワークを再確認すると共に、年代、事業、地域を越えて親睦を深める良いチャンスとなったと確信しています。美味しいものに囲まれながら気の合う仲間と語り合う＝おのずと“スマイル＆コミュニケーション”になります。

これが、私たちの活動を活性化させるのに大変重要な要素だと思います。

長年の功績を称えられた先輩方の表彰式、近年参加青年たちによるクイズ形式での報告会と３県ＩＹＥＯ・個人・「世界青年の船」事業既参加青年組織による事後活動の報告。今回の大会では随所で実行委員の方々の豊富なアイディア、企画力、実行力が感じられ、感心させられました。参加者が笑顔で心から参加して良かったと感じる会を開催することは容易ではありません。全国大会は、多くの方が貴重な時間を割き、一致団結された賜物です。長野県や長野県ＩＹＥＯ、その他全ての関係者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

ＩＹＥＯは、今後とも自分たちの貴重な経験を世の中に発信し、歴史ある団体として社会に貢献していけるよう全国の皆さんと共にがんばっていきたいと願っております。

長野大会報告書に寄せて

（財）青少年国際交流推進センター理事長　上村 知昭

日本青年国際交流機構第２４回全国大会・第１５回青少年国際交流全国フォーラムは、北アルプスを一眸にのぞみ、澄んだ空気と心温まる温泉の街、長野県大町市での開催でした。交通事情等いささか心配しておりましたが、開催地の人と自然の魅力は強く、２００人を超える参加を得て、国際交流既参加者の皆さんの絆と事後活動状況を確認しつつ相互研さんを図り、その成果を今後の諸活動に反映させていくという所期の目的は十分達せられたと存じます。

第１５回青少年国際交流全国フォーラムは、まさに開催地にピッタリの「環境」をテーマに、ジャーナリスト御出身で山に関する多くの著作を上梓されている菊地俊朗先生の「山の社会学」と題しての基調講演、そして「地元の自然と人にふれあおう」を合言葉にしての八つの分科会は、ともにテーマにふさわしい大変有意義で楽しいものでした。参加者皆さんが大いに満足され、いろいろと学び、成果を得られたことと存じます。田口委員長をはじめ実行委員の皆さんの御苦心、御苦労がしのばれ、まさにその結実したものとなったと存じます。ここに改めて田口委員長、実行委員そして長野県ＩＹＥＯの皆さんに深く敬意を表し感謝を申し上げます。また、御支援、御協力をいただいた長野県そして大町市をはじめとする地元の団体、関係各位に厚く御礼申し上げます。

今日では、どの県でも「ブロック大会」が、そして多くの都道府県で「全国大会」も開催でき、内容も充実し、多彩になってきているのは嬉しいことです。また、ＩＹＥＯの皆さんが、内閣府青年国際交流事業で招へいされた外国青年の「国内プログラム」等を実施する実行委員会で、その中核となって活動されていることに敬意を表しますとともに、今後とも派遣の経験等を生かされてそれぞれの地元、それぞれの分野で国際性に富み内外に広いネットワークを持つ青年リーダーとして大いに活躍され、ますます評価を高められることを期待し祈念して「大会の報告」に寄せる言葉といたします。

全国大会を終えて・・・ただ、感謝・・・

日本青年国際交流機構
第 24 回全国大会長野大会実行委員長　　田口　敏子

この度の日本青年国際交流機構第 24 回全国大会・第 15 回青少年国際交流全国フォーラムへのご参加されました全国各地の皆様、誠にありがとうございました。

実は、昨年の愛知全国代表者会議の折、長野県での開催ならば、会場の地としてはアクセスのよい街中より「山里、温泉を」と、圧倒的なご要望をいただきました。そのご意向を受けて、先ず開催地の選定にエネルギーを使いました。その中で、「自然」というものから、偉大さ、温かさ、厳しさを様々な分野からの作業を重ね、改めて考えさせられる機会となりました。その事が、その結果が、地球人で行こう！～信州から見つめる明日のＥＡＲＴＨ～と大会テーマとなった要因の一つです。

今、この地球という星の中の人間として、本当の豊かさとは何？を多方面の角度から、語り合えたら、の場として。

凛として、清々しい、雪の北アルプスの懐に包まれたこの地(会場)の「地域力」からでしょうか、参加された方々の同志愛を所々に感ずることができました、いわば、参加者としての心得、そして、開催地の実行委員としての心得がバランス良く共有し合えた運営に、感謝の心いっぱいであります。

私は「国際」という呼称の事業への参加者として、世代、地域、を越えて、日本人として同志として、年に一度この様に、日本全国各地で開催を重ねる意義を認識し、これからの事後活動について改めて考えてみる機会となりました。

ここに、今回の大会へ遠方から参加された方より、大会当日のスナップ写真が郵便で送られてきました、そこに「感動した！」とのメッセージが添えられてあります、最高の評価をいただきました。

最後になりましたが、今回の全国大会開催に至るまでに、ご指導、ご支援をいただきました関係の皆様方には、心から感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。

四季の変化に富んだ、信州・大町市温泉郷(人間回復の地)へ、どうぞまたお越し下さい。

大会を無事終えて

北陸信越ブロック幹事　山口　博士

はじめに全国の皆様の温かいご協力とお力添えによって、今回の全国大会も無事成功に終わった事のお礼をこの場をお借りして申し上げます。

最初「全国大会の会場を大町にしようと思うのですが、良いでしょうか。」連絡をもらって自分の耳を疑ってしまった。今回長野県で全国大会を開くことになって、まずポイントのひとつは『会場をどこにするか・・・・』ということだった。参加者を多く集めるために、毎年全国大会は交通の便が良いところが会場となっていることが多い。実際に関係機関へのお願いに現地へ向かったが、交通機関の関係か、自分の住んでいるところが田舎なのか、一番近い海外の国へ行くよりも時間がかかってしまった。

実行委員会でも『交通の便が悪い・・・全国から来てもらえるのか・・・』などの声も多く出たが、『東京、大阪、名古屋からの送迎バスを出したらどうか』とか、『いつもとは違う、長野らしさを盛り込んだプログラムにしたらどうか』とか、『分科会を外で体験型にしたいので基調講演の前にすることは可能か』など、様々な長野らしいプログラムの案がでてきた。実行委員会では『交通の便の悪いのはどうしょうもない。でも、このような機会じゃないとこのような処は来れないし、来てもらったからには満足してもらって帰って欲しいし、満足できるように精いっぱいのおもてなしをしよう』とみんなで確認しあって長野を後にした。

実行委員会は春からほぼ１ヶ月に１回のペースで進められ、気がつくとあっという間に大会当日。『どれくらい参加者は増えたのだろうか・・・』等と思いながら、長い道のりが余計長く感じながら会場へ到着。そこで多くの参加者が全国から来てくれると聞き、思わず熱いものが込み上げてきた感動は忘れられません。

大会も皆さんの協力と、実行委員会の精一杯の創意と工夫とおもてなしで大成功に終わりました。皆さんのおかげで、こんな素晴らしい全国大会の運営に携われた事を感謝し、参加者一人一人の力の集まりで、こんなに素晴らしいものが出来る事を再認識させていただくことができました。

全国の皆さんありがとうございました。

大会日程

◆ 大会1日目　11月29日（土）

○時間	○内容	
12：00～12：50	受付	ウエルカムりんごジュースとおやき
13:00～13：30	開会式	パネルシアターでの歓迎
13:50	分科会集合	
14：00～16：00	①キャンドル作り～森の恵み「蜜蝋」を使って	
	分科会 ②板絵体験～画家「齋藤清」さんによる特別レッスン	
	③バードコール作りと大町温泉郷散策	
	④大町山岳博物館見学	
	⑤ワールドカフェ　in　NAGANO	
	⑥250歳のブナの木に出会う森林散策	
	⑦薪バス「もくちゃん」でゆく！身近なエコツアー	
	⑧地元の食文化体験	
17：00～18：20	基調講演	
	「山の社会学」	
	講師　菊地俊朗氏	
18：20～18：30	記念撮影	
18:50	懇親会開場	キャンドルとアカペラグループによるオープニング
19；00～21：00	懇親会	分科会の報告発表、ジャンベの演奏　等
21：30～23：30	二次会	

◆ 大会2日目　11月30日（日）

○時間	○内容
6：30～8：30	朝食
～9：00	チェックアウト
9：00～9：20	表彰式
9：20～10：00	帰国報告会
10：00～10：05	休憩
10：05～10：35	事後活動報告
10：35～11：10	参加者交流会
11：10～11：30	閉会式

開会式　1日目　13：00～13：30　／　会場　2F信濃路

司会：副実行委員長　福永理和

1.	開会の言葉	第24回全国大会長野大会　実行委員長	田口敏子
2.	あいさつ	内閣府政策統括官	松田敏明
		日本青年国際交流機構会長	大河原友子
		(財)青少年国際交流推進センター理事長	上村知昭
3.	来賓挨拶	長野県副知事	板倉敏和
4.	祝電披露		
5.	閉会	長野県青年国際交流機構会長	樋口敦子

内閣府政策統括官　松田敏明

日本青年国際交流機構
会長　大河原友子

(財)青少年国際交流推進センター
理事長　上村知昭

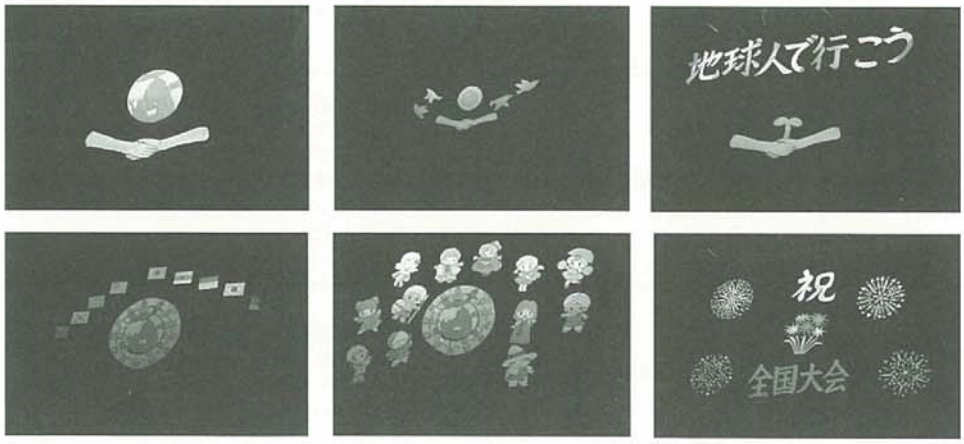
長野県副知事　板倉敏和

実行委員長　田口敏子

長野県青年国際交流機構
会長　樋口敦子

○パネルシアター

開会に先立ち、実行委員会の降旗伸子がパネルシアターにて参加者みなさんを歓迎しました。



分科会 ～地元の自然と人にふれあおう～

分科会NO	タイトル	定員	参加費	内　　容	会場	移動
分科会①	キャンドル作り～森の恵み「蜜ロウ」を使って～	10	1000円	蜂の巣から蜂蜜を採る時、不要になるのが「蜜ロウ」。地元の森にある蜂の巣から取れた「蜜ロウ」を使い、オリジナルのキャンドルを作ります。会場は、平和・共生・公正・持続可能な暮らしをモットーにエコ製品、フェアトレード製品を販売する『グリナーズビレッジ』という大町市街地にあるお店。帰りには、地元特産品がいっぱいの土産店へも立ち寄ります。	グリナーズビレッジ	ホテルバス
分科会②	板絵体験 ～画家「斉藤清」さんによる特別レッスン～	10	1000円	自然を題材に独自のスタイルで板絵を創作する画家・斉藤清氏。長野大会のモチーフである絵も氏の手によるものです。氏に直接教えを受けながら、「板絵」の特殊な技法にチャレンジしてみませんか？会場は、ホテルから別荘地へ抜ける田園地帯を10分ほど歩いたところにある氏の自宅兼ギャラリー。あなたの創作した作品はお土産となります。	全国大会モチーフ作家斉藤清氏ギャラリー	徒歩
分科会③	バードコール作りと大町温泉郷散策	30	600円	「バードコール」って、知っていますか？鳥の鳴き声に似た音が出るクラフト小物で、鳴らすと鳥が集まってきます。お手製のバードコールを鳴らしながら、大町温泉郷や、その環境資源を散策してみませんか？希望者は「酒の博物館」の見学も可能です。	森林劇場多目的ホール	ホテルより散策
分科会④	大町山岳博物館見学～自然と人の共生について～	30	400円	大町山岳博物館は、日本で最初の「山岳」をテーマにした博物館。素朴な疑問から、「日本の屋根」北アルプスにみられる地球環境の変化に至るまで、楽しみながら、一緒に考えてみましょう。館内にある特設「山小屋」内では、学芸員さんによる山岳の歴史などについてお話いただけます。	大町山岳博物館	ホテルバス
分科会⑤	ワールドカフェ in NAGANO ～各国のお国事情についてお茶を飲みながら語ろう～	40	無料	長野県民は、「お茶と漬物をいただきながらの長談義が好き」と言われます。そんな長野の慣習に習い、信州大学に在籍中の留学生たちと、各国のお茶をお供に、身の回りのこと、エコのこと、未来のことなど、語ってみませんか？各国のプレゼンテーションもあります。	立山プリンスホテル１Ｆこまくさ	ホテル内
分科会⑥	250歳のブナの木に出会う森林散策～これからの森のあり方について考える～	15	500円	豊かな森は、動植物との共存の源。この森を、22世紀のこどもたちに残したい…森の再生と活用を願って作られたＮＰＯ「森づくり人づくり22」のみなさんと、針広混交林を実践されている荒山林業の荒山雅行講師のガイドで、樹齢250年とも言われるブナの木を見に、山に入りませんか？人が手をいれた混交林と、間伐がされず荒れた山の違いって何？森林環境を一緒に考えましょう。	荒山林業	車
分科会⑦	薪バス「もくちゃん」でゆく！身近なエコツアー	23	2000円	日本で唯一公道を走るボンネット型薪（まき）バス「もくちゃん」でのエコツアー。用水路を利用した発電システム「くるくるプロジェクト」や「菜の花プロジェクト」では廃食用油を利用した軽油精製工場をまわります。途中、グランドワークという手法を使った協働の杜「わっぱらんど」で休んだりと、明日から始められる「身近なエコ」がテーマです。	大町エネルギー博物館・わっぱらんど ほか大町市内	もくちゃんバス
分科会⑧	地元の食文化体験 ～信州そばと灰焼きおやき～	30	1000円	囲炉裏のある施設『体験館そば処八坂』で、地元の皆さんの手ほどきを受けながら、信州名物「そば」と「灰焼きおやき」づくり体験をしてみませんか？山の中で、満喫するおいしい空気と食べ物は格別です。	体験館そば処八坂	ホテルバス

キャンドル作り～森の恵み「蜜ロウ」を使って～

■指　導　者：　グリナーズビレッジ　八木聡氏　八木まきこ氏
■場　　所：　大町市　グリナーズビレッジ
■参加者人数：　10名
■担　当　者：　小林モナ由　輿あずさ

キャンドル制作前に、ご主人より蜜蜂や蜜ろうについてのご説明をいただきました。

ミツバチには西洋ミツバチと日本ミツバチがいて、私たちが普段口にしている蜂蜜は、西洋ミツバチのものだそうです。西洋ミツバチの方が蜜が多く取れるそうで、その理由は蜂蜜精製の技術が西洋で発展したことが大きく影響しているそうです。

一方、日本ミツバチの蜂蜜精製技術はまだ発展途上で、多くの蜂蜜が取れないそうです。日本ミツバチを飼育するためには、まず自然界から女王蜂を捕まえてきて、巣を作らせるそうです。しかしせっかく巣が作られても、蜂蜜を採取する際には巣を壊し、蜂も殺さなければいけないそうです。技術が発展すれば、蜂を殺さずに蜂蜜を採取できる用になるかもしれないとのことでした。

皆さんは蜜ろうをご存知でしょうか。蜜ろうはミツバチの種類に関係なく、どの蜜蜂からも作られているそうです。私達人間からすると、「蜂蜜を採取するときに出る時のゴミ」のようなものだが、ミツバチにとっては巣を作るときの補強材として蜂の胃袋でつくられる大事なものです。

「蜂蜜を採取するときに出る時のゴミ」と前述しましたが、化学的なロウがまだ無かった頃のヨーロッパでは身分の高い人しか使用できなかった高級品だったそうです。
蜜ろうは、化学素材であるパラフィン素材のロウと異なり、燃やした際にマイナスイオンが発生する、自然に優しいロウなのです。

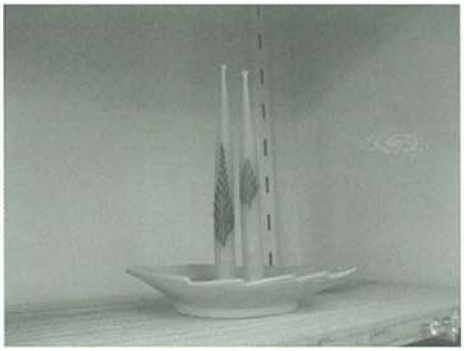
説明を聞いて、西洋ミツバチと日本ミツバチの蜂蜜を味わい比べました。日本ミツバチの蜂蜜の方がクセが強いです。（機会があればぜひグリナーズビレッジにてご体験ください。）

いよいよキャンドル作りです!

今回使用した蜜ろうは、八木ご夫妻の知人の西洋ミツバチから採取されたものでした。固形の薄茶色の蜜ろうをビーカーの中にいれ、湯せんにかけて液体状にしたところに、好みの長さに切ったキャンドルの芯を数秒漬け、１分ほど冷まし、また数秒漬け・・・を７、８回繰り返します。最後もしくは最後のディップの直前に、予め用意しておいて下さった、ドライラベンダー、バラ、スペアミント、ナライシダを好みでキャンドルに貼り付けて完成です。作ったキャンドルをいつ使おうかなあ、誰にあげようかなあ、などと思いをはせながら、１人３～４本ずつ作りました。デザインは十人十色。面白い形に挑戦した人、自分のデザインに満足できない人、ラッピングも含めオシャレに完成した人・・・作ったキャンドルの形は違っても、参加した皆の顔は笑顔一色でした。

分科会①では、キャンドル作りという楽しい作業を通し、自然界が生み出す素材の素晴らしさ、温かみを知ることができました。また、八木ご夫妻の生まれたての赤ちゃん、参加者の赤ちゃん、もうすぐこの世に出てくる参加者の赤ちゃん、合計３人の天使も参加し、同時に「愛」も感じることができました。

会場となった八木さんご夫婦が営む「グリナーズビレッジ」は、フェアトレード商品を扱い、また天然素材に関するテーマから、生活に密着したテーマまで、様々なトピックのワークショップも開催されています。グリナー（Greener）とは平和・共生・公正・持続可能な暮らしをする人を表しています。



お忙しい中快くワークショップをお受けいただきました八木さんご夫婦に心より感謝申し上げます。

ご参加、ご協力ありがとうございました。（小林記）

板絵体験 ～画家「齋藤清」さんによる特別レッスン～

■指　導　者：　齋藤　清氏
■場　　所：　長野県大町市大町温泉郷　齋藤　清氏ギャラリー
■参加者人数：　１３人
■担　当　者：　山本仁美、岩田和子

分科会②では自然を題材に独自のスタイルで板絵を創作する画家・齋藤清先生に直接教えを受けながら「板絵」の特殊な技法にチャレンジしました。

会場である齋藤清先生の自宅兼ギャラリーは立山プリンスホテルから 10 分ほど歩いたところにあり、参加者全員で田園風景のなか、板絵体験で題材にする風景や草花を探しながら会場へ向かいました。天気もよく大町の山々もとてもきれいに見えました。ギャラリーに到着し、まず始めに板絵の作品を見せていただきながら、作品づくりの説明を受けました。

「板絵」とは版画の版木そのものを作品にするという発想から生まれた齋藤清先生独自の画法です。アルミや木の版に下絵を描き彩色をし、上に墨をかけます。その墨を自作の道具などで削りながら作品にしていきます。版画とは違い一点ごとのオリジナル作品です。その日本人ならではの研ぎ澄まされた感性の世界は、「忘れていた懐かしくて豊かな温もりを呼び覚ます」と絶賛されています。実際に身近にある風景や草花などを題材にした作品は、素朴であり、繊細でもあり、温かさを感じ、しばらくその世界に魅入ってしまいました。今回の全国大会のモチーフにもなっている作品は目にされた方も多いと思います。

板絵について説明していただいた後、墨を吹きつけた縦２３ｃｍ、横１６ｃｍの大きさの黒い板に一人一枚板絵体験をしました。最初に板に題材をデザインするのですが、故郷や大町の風景をデザインした人、花や野菜を描いた人、船を描いた人、当日身近にあるものを探してデザインした人、様々でした。その下絵を竹串のような道具で削っていくのですが、始めは皆どのように削ったらよいのかわからず戸惑っていましたが、齋藤清先生に影の作り方などの指導を受けると、童心にかえったように夢中になって作品に取り組みました。

最初は時間内に完成するのか不安もありましたが、思ったより早めに作品が完成し、齋藤先生にニスを塗っていただき、すべての作品を並べて鑑賞しました。ひとりひとりに作った感想を述べていただき、それぞれの個性があふれる素敵な作品になりました。参加者の中には「ぜひ、息子にも体験させてあげたかった」や「全国大会の良いお土産ができました」と話されていた方もいらっしゃいました。

齋藤先生の暖かく気さくな人柄や、奥様からのおもてなしをいただき、アットホームな雰囲気の中で楽しく分科会を終えることができました。

また、当日の懇親会の分科会の報告で皆の作品が発表できるよう、齋藤先生が出来上がった板絵に急いで白い台紙を貼って間に合わせて下さり、立派な作品がお土産になりました。

今回、快く板絵体験を引き受けて下さった齋藤先生に感謝致しますとともに、参加者の皆様ご協力ありがとうございました。

（山本記）

バードコール作りと大町温泉郷散策

■指　導　者：　安井 孝治　氏
■場　　所：　森林劇場 多目的ホール
■参加者人数：　25 名
■担　当　者：　多賀谷 寿美

バードコールとは鳥の鳴き声に似た音のする木工細工で、鳴らすと鳥が集まってきます。

まず先生のお手本を見てから、一人ひとり好きな木を選び、バードコール作りが始まりました。材料になる木は桜・白樺・ホウの木・ガマヅミなど。手順は、予め先生に用意していただいた 10cm 程の長さに切った木にカッターで模様を作るように木の皮をむき、両側の端を大根の面取りよろしく角を取ります。端から 2～3cm の所をのこぎりで切って二つにし、先生にパーツそれぞれに穴を開けていただき、片方にボルトの頭を打ち込んでもう片方をねじ込み調整します。そして音がするようになったら完成です。

作業時間は 1 時間程度。参加された皆さんは思い思いに自分の作品作りに没頭していました。出来上がった後はバードコールを鳴らしながら大町温泉郷散策･･･と、ここで先生から注意事項が言い渡されました。『バードコールを鳴らすと鳥が集まってくるのは、自分の縄張りを荒らされたと思うから。だからやたらと鳴らしてはいけない』とのことです。

バードコールは、木の種類によって違う音がします。同じ素材でも乾燥具合などによって違う音がするそうです。また、木と鉄との接点で音が鳴るので、きつく閉めると高音が、弛めると低音が出るそうです。あと、白樺の木は見た目がいいので人気があるけれど、樹脂が多いので途中からあまり音が鳴らなくなってしまう･･･そうです。

安井先生がバードコールを始めたのは 6～7 年前で、山整備の際に切った枝で「子ども達と何をやるか」を考えたのがきっかけだそうです。始めのうちは木が湿っているので鳴らない人が大勢いたということで、試行錯誤を重ねられたそうです。今回の分科会では、手作り家具を作っている先生の仕事場の屋根裏で二年間自然乾燥したものを使わせていただきました。

間伐材の有効利用、野鳥類とのふれあい、それに手作りのお土産ができた分科会でした。

（多賀谷記）

大町山岳博物館見学～自然と人の共生について～

■指　導　者：　清水 隆寿　氏、清水 博文 氏
■場　　所：　〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1
http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
■参加者人数：　17 人
■担　当　者：　福永理和

大町山岳博物館は北アルプスに抱かれた大町に昭和 26 年(1951)11 月 1 日に、戦後の混乱が続く昭和 24 年ころ、まれに見るこの山岳環境と独自の地方文化を見つめ直し、その発展の拠点を求める青年たちの熱意が地域住民の積極的な支援を得、「岳（だけ）のまち・大町」にふさわしい、日本で初めて「山岳」をテーマとして開館されました。

「山博（さんぱく）」の愛称で市民に親しまれ、北アルプスを中心とする自然や登山の歴史についての展示、また、「生きた学習・研究の場」として動植物を飼育・栽培する付属園が併設されています。

大町市は「山岳文化都市宣言」のまちで「山博」はその中心施設として、北アルプスなど山々の貴重な資料を収集保管・調査研究し、それをもとにした展示や催しなど、楽しく興味深く学ぶことができる教育普及活動を展開されています（「山博」プロフィールより抜粋）。

開会式後の移動中、日没時間やテーマに沿って、今回は通常のプログラムと異なり、分科会を先に実施し、その後、基調講演を実施とした経緯を説明。また、事前の博物館との打合せどおり、各参加者の興味・関心の差異が大きいことを想定し、展示内容の説明は基本的に質疑応答を中心に実施できるよう、積極的に質問して頂くよう依頼。ふと、船の「課題別視察」時、ＰＹが解説者を質問攻めにしている姿を回想。

さて、博物館に到着すると、「日頃の行い」はさておき、雪を冠した北アルプスの雄大な山々が一望でき、寒さも忘れ、暫くその姿を眺め、写真撮影すること十数分。特に、南国からの参加した方にとっては普段見ることのない雪山に、また担当者にとっては車内で集めた入館料@400 円の支払い等、入館手続きの時間を頂き、改めて天候に恵まれたことに感謝。

それにしても余りの景色の素晴らしさに、そのまま玄関前で講師、清水学芸員の紹介に引き続き、概要説明と時間配分の説明を聴き移動した。

館内の展示について、今後訪問したい方のために簡潔に記すと、1F は特別展示室の山の絵画に始まり、日本の登山史や装備の変遷。2F は北アルプスの動植物を中心とした自然環境、3F 展望室は大町の町並みと山々のパノラマを見ながら「雪形（ゆきがた）」等々がある。それぞれのご担当の講師に解説して頂き、参加者からは多様な質問が積極的に出され、また付属園では、飼育されているカモシカ等を観察し、その素朴な目に心を和ませることができた。アンケートにも記述されていましたが、学芸員方の説明があると、やはり理解の度合いが深まり、かなり有効であることを再認識できた見学となり、基調講演に向けての事前学習・基礎講座とするのに十二分の成果があったと思われる。

最後にご解説頂いた清水学芸員、参加者の皆さんはじめご協力頂いた関係者の皆様に感謝致します。

（福永記）

ワールドカフェ in　NAGANO　～各国のお国事情についてお茶を飲みながら語ろう～

■場　　所：　立山プリンスホテル１Ｆこまくさ
■参加者人数：　24 名
■担　当　者：　ミョータンティ、ヘイン・ウッティ、ロベーナ、ポーイ、ツェネ、江守雅美

この分科会は、信州大学で学んでいる留学生が自国のプレゼンテーションを行い、お茶を飲みながら、ざっくばらんに語り合いましょうと企画されました。

まず、樋口会長からあいさつがあり、長野ＩＹＥＯが毎年実施している海外経験の豊富なゲストを招き世界を身近に体感するイベント「ワールドスタディカフェ」からこの分科会が考案されたことが紹介されました。

プレゼンテーションでは、カンボジア出身のヘイン・ウッティさん、モンゴル出身のツェネさん、タイ出身のポーイさん、リトアニア出身のロベーナさん、そして長野ＩＹＥＯのメンバーであるミャンマー出身のミョータンティさんからそれぞれ自国の歴史、名所、風習、文化、言語などについて説明がありました。参加者は、それぞれの国の特徴を知り、各国のあいさつを一緒に発音するなど和やかな雰囲気を繰り広げました。

その後、お茶の時間となりました。ミャンマーのお茶、モンゴルのチャイ、紅茶、日本茶などが用意され、信州名物の野沢菜や各種お漬け物をお供に、留学生を囲んでいろいろな語り合いが始まりました。

参加者からは、「各国の事情を知ることができ、興味深かった」「ＴＶや本では知ることのない普段の生活や習慣、ものの考え方を学ぶことできサイコーでした」などのコメントが寄せられました。

参加された皆さんありがとうございました。（江守記）

分科会⑥　　～ 地元の自然と人にふれあおう ～

250 歳のブナの木に出会う森林散策　～これからの森のあり方について考える～

■ガ　イ　ド：　荒山林業　荒山雅行氏　　NPO「森づくり人づくり 22」山内香代子氏
■場　　所：　大町市荒山林業私有地
■参加者人数：　16 名
■担　当　者：　降旗伸子　三澤智恵
■内　　容：　豊かな森は、動植物との共存の源

針広混交林を実践されている荒山林業のガイドをしてくださる荒山雅行さんと、22 世紀のこどもたちに残し、森の再生と活用を願って NPO を立ち上げた「森づくりひとづくり 22」事務局の山内香代子さんとで、人が手を入れた混交林と、間伐がされず荒れた山の違いの話を聞きながら、樹齢 250 年とも言われるブナの木に逢いに出掛ける。

雪残る山道を登る参加者

全国大会 4 日前、実行委員の多賀谷さんから、「根雪で山に登れないかも･･･」と、山内さんが話していることを聞いて、雪が解けることを願い、不安を抱えながら迎えた当日。
“天気は最高！”冷え込みで北アルプスが押し迫る勢いの姿で“気分は絶好調！！”　これは、何が何でも参加者をブナの木に逢わせてあげたい。
山内さんから「時間どおりにホテルに迎えにいきます。」と連絡があり、その時既に、参加者の喜ぶ顔が見えた一瞬でした。

ホテルからスタッフ車と、参加者の藤田さんが快く引き受けてくれた車に分乗して、走ること 15 分。
国道から横道に入り険しい山道で、参加者は大はしゃぎ。
しばらくすると山小屋が見え、荒山ガイドと合流。
更にブナの木の近くまで車で移動。途中、雪の重みで木が倒れ道を塞ぐ木の下を車がスレスレに通り抜け、ハンドルを握る者は冷や汗。参加者は、記念撮影と、ブナの木に逢う前から楽しむ姿を見て、ホッとしました。
車から降り、道のない雪道で足を滑らせ、時には悲鳴をあげながら登り進むと、積雪にハート型の鹿の足跡を発見！
木の実を採集して喜ぶ参加者もいました。

荒山ガイドと軽ﾄﾗｯｸの荷台でﾎﾟｰｽﾞを取る参加者

ハート型の足跡

ホウの葉の上に
木の実の集める参加者
左から
栗・どんぐり・ミズナラ

やっと出逢えたブナの木の前で集合写真

急斜面を登り続け、疲れが出始めた頃に前方から“見えた～、大きい～”と声が聞こえ、カラマツやシラカバ地帯の尾根から突如現れたのが、堂々となる姿の樹齢250年と言われるブナの木。

幹の太さは、大人6,7人が手をつないで届く大木。周囲に木々を近づけさせないほどの枝も根も大きく広がり、木に抱きつきたくなる気分にさせられるのか、何人もの参加者が手を大きく広げ樹齢 250 年のブナの木から癒しを受けていたのが印象的でした。

ブナの木との別れを惜しみながら、再び手入れが行き届いた明るい森の白い絨毯道を楽しみながら山小屋に戻りました。

地蜂入りせんべい

焚き火の前で体を温める参加者

山小屋の前では、荒山ガイドの夫人が、焚き火をして待っていてくれ、体と視界の両方から温もりを体感し、お茶には、どくだみ茶、クッキーに地蜂入りせんべい、栃の飴・キハダ飴、100%のハチミツと地元の味のおもてなしを受けました。

荒山さんは、100年先の森のために、独りで草刈や間伐などの森林作業を行い、森林の密度を落とし、空間が生まれ陽が入り広葉林が生えるという針広混交林の森の再生・育成に力を尽くしておられ、内山さんは、里山の再生や活性化のために、森づくり・人づくりの掛け橋として活躍されています。

山小屋の前でおもてなしを受けた集合写真

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

安い輸入林や時代の流れで、山の仕事がなくなり、日本の山が放置されている今日。

友達と食事をしている時、1人はマイ箸を持参、もう1人の友は、足元に箸を落とし、「ニュースで木が余っていると報道されていた」と言い、割り箸を使い放題。おかしな光景を目の前に、苦笑いをしてしまい、身近でも情報に流されている実態を知りました。

「ブナの木」の分科会に参加された方が、自分の体で、風・空・雲・雪・光・温もり・おもてなし等から少しでも何かを感じられ、日本の森林のために、日本の間伐材を理解し、次の世代に残す「意識」が芽生え始めたことを信じたいです。

（三澤記）

分科会⑦　　～ 地元の自然と人にふれあおう ～

薪バス「もくちゃん」でゆく！身近なエコツアー

■協　力　者：ＮＰＯ地域づくり工房代表理事　傘木宏夫氏/北アルプス・バイオマスを考える会事務局長　工藤哲秀氏
■参加者人数：23 名
■担　当　者：矢口稔　北原瞳

ＮＰＯ地域づくり工房、北アルプス・バイオマスを考える会の『地域に小金が回る仕組みをつくろう』の活動の一部を薪バスもくちゃん＆バイオ軽油バスに乗車し見学しました。

○ わっぱランド　～田んぼに流れる水を温める先人の知恵～

川の上流から運ばれてきた冷たい水を広く浅く流すことで田んぼにかける前に水が温まるようになっているのがわっぱランド。この水は南に広がる地域のたんぼを潤しています。わっぱランドだけでなく大町の町のあらゆる所にこの昔の知恵が使われていました。

○ 大町エネルギー博物館

～日本で唯一公道を走るボンネット型薪(まき)バス「もくちゃん」でのエコツアー＆もくちゃんの DVD を鑑賞～

大町エネルギー博物館には廃材の薪を使い燃料にして動かしている薪バス「もくちゃん」がある。以前は広い範囲で運行していたが、維持費等の問題も多く、現在は大町エネルギー博物館周辺で運行をしている。乗ってみると中は通常私たちの乗るバスと変わらない。薪の煙は外だけで、中には入ってこない。少しレトロな作りになっている。運転手の他にも薪の調節を行う人がいてその人がワイパーも手動で動かす様子に乗車している人たちは驚いていた。

○ 川上ミニ水力発電所　～用水路を利用した発電システム「くるくるプロジェクト」～

民家の用水路を使って発電を行っているミニ水力発電併設のオール電化住宅の見学をさせていただきました。これにより家庭の電力の約半分が補給されています。水路はたった６０ｃｍの幅で落差は４５ｃｍ、それで約３５０ｗを発電させることが可能です。また家中の雨水を一カ所に集め電気の力を紹介したり、自転車での電力作りの体験などを大人から子供まで楽しめる発電所でした。　小さな水路を使って行う発電でも、勝手に発電することはできず水路利用の権利の必要性も教えていただきました。

○ バイオ軽油製作所　～廃食油再生処理プラント見学～

廃用食油を利用した経由精製工場をまわりました。エコツアーで利用したバスの燃料は地域内から　てんぷら油を集めてここで軽油にして再生されていました。

日程の都合上活動の一部しか見学できませんでしたが、これらの活動のほかにも、廃止になった大町スキー場を使った「美麻なたね油」や木崎湖清掃活動、天然冷蔵庫など活動の範囲はとても広く、「地域に小金が回る仕組み」がさまざまな努力によって無理なく地域に定着していることを参加者は感じました。またエコツアー(車中での話)はとても楽しく、笑いがあったり感嘆があったりと大変充実した時間になりました。この活動を参考に「では自分は何ができるのだろう」を考えるきっかけになればいいと思います。　(北原記)

地元の食文化体験～信州そばと灰焼きおやき～

■指　導　者：　北沢 千代司氏 他
■場　　所：　体験そば処　「 八坂 」
■参加者人数：　28 名
■担　当　者：　山口 登志恵　田畑 静吾　日向野 美峯

この分科会は、実際に自分で作ったおそばとおやきが食べられるということで、夕食の前に予定が組まれていたにも関わらず、全分科会の中で最も希望者の多かった分科会でした。

参加人数が多かったために、行きのバスの中では、そば打ちを体験するグループとおやき作りを体験するグループの 2 グループに分けました。皆、希望のグループに入れたようで、担当者としては一安心した場面でした。

私自身、長野県に住んでいたにも関わらず、おやき作りは初めての体験でしたが、県外からいらして頂いた参加者の方々からも初めての経験でとても楽しみにしているという声が多く聞こえました。

お世話になった体験そば処「八坂」さんは、毎年、たくさんの修学旅行生の団体さんや個人で観光に来た方たちを多く迎え入れているというお話を聞きました。また、今回作らせてもらったおやきは、「灰焼きおやき」というもので、ほうろくで表面を焼いた後に囲炉裏の灰の中に入れて蒸して作るものでした。体験処を入ってすぐのところに、囲炉裏があり、これがここの体験処の人気の理由のひとつだそうです。

今回は、時間の都合上、体験処の方々が私達のために愛情をこめて練って、寝かせてあったおやきのタネを分けて丸めるところから始めました。そば打ちの方も同様に、途中からの作業となりました。

おやき作りでは、中身の野沢菜漬けをうまく包めず皮の表面がでこぼこしてしまったり、また、そば打ちでは、均等の細さに切り分けられず、きしめんのようなものが出来てしまったり等々ありましたが、皆の非常に楽しそうで満足そうな笑顔がとても印象に残っています。

おやきもおそばも、全員でおいしくいただき、とても有意義な時間を過ごせました。

囲炉裏の火を囲んでのまったりゆったりのお喋りが、参加事業の枠を超え、言葉では表現できないような心のつながりを深めてくれたように感じました。

体験処の皆様、参加していただいた皆様、スタッフの方々、ありがとうございました！

（日向野記）

基調講演

1日目　17：00～18：20 ／ 会場　2F 信濃路

担当：田口敏子　小林 昭子

講　題　「山の社会学」

講 師　菊地俊朗氏　山岳ジャーナリスト・元信濃毎日新聞社役員

プロフィール
1935年、東京生まれ。早稲田大学政経学部卒業。信濃毎日新聞社入社。社会部長、常務取締役松本本社代表等を歴任。記者時代より山岳遭難、山岳環境問題を追求。この間、64年、長野県山岳連盟を中心とするヒマラヤ・ギャチュンカン(7922㍍)登山隊に隊員として参加。その遠征報道で日本新聞協会賞(編集部門)を受賞。著書に『山の社会学』・『北アルプスこの百年』(文藝春秋)『見る・撮る・描く絶景の山』(信濃新聞社)等がある。

初日、分科会後の第二部で行われた基調講演は、信州の最大手地方紙である信濃毎日新聞社でご活躍されたジャーナリスト、菊地俊朗先生の著書と同じ「山の社会学」と題して講演をいただきました。

山への飽くなき情熱を90分間にわたり、熱く語っていただきました。山の置かれている現実、自然環境、そして、その裏にある乱開発、環境への負荷等、山をこよなく愛する菊地先生だからこそ見える切り口で、3,000m級の山々が連なる山懐に抱かれたアルプスの見える地、大町から『環境メッセージ』を発信していただきました。

話の端々で語られた、「上高地」、「扇沢」、「奥志賀のブナ平」などの固有名詞は、信州の山々に興味のある方や、地元の者としては多くを語らずとも伝わるイメージがあるのですが、全国からおみえの多くの方にとって、地名からその情景や場所を思い浮かべるのが困難であったことは想像に難くありません。

講演時に、各地の地図や写真を提示しておけば、さらに理解度が深まったのでは、という私たちの準備不足は否めません。しかしながら、エネルギー革命により、人の手が入らなくなったことで荒廃した杉や檜などの人工林の現状や、公有林と私有林の違いによっても、その管理状態や問題が異なる点、そ

奥穂高岳、前穂高岳と奥穂高山荘
(中央より手前左側の尾根)

れによって引き起こされる災害、あるいは獣害、ゴミや汚水処理の問題についてなど、国土の 4 分の 3 を森林が占めているという日本の状況の中で、どこの地域にもある話として身近に感じていただき、若干でも地域での環境への取り組みや意識を高め、活動に参加するきっかけになればと期待するものです。

菊地先生曰く、『一番アルプスがきれいな時期』に全国からお集まりいただいた皆様に、陽の照っている時間帯は外で、遊びや学びの場を設け、信州の空気に存分に触れていただきたいという我らスタッフのホスピタリティーの思いは、真っ青な空と清廉な空気に身を委ねた皆様に受け入れていただいたものと思います。

分科会と夜のサプライズ懇親会の間に設けた基調講演は、山に関係するスライドを見ながら、信州の豊かな自然や環境問題についてを考えるひと時となったのではないかと思います。

この時間が、皆様にとって、全行程を通じて発信している「人として本当の豊かさとは何か」を感じる一コマとなったことを願いつつ・・・(深謝)　　(小林記)

※ サイン入りの著書、写真集は好評につき完売いたしました。ご協力ありがとうございました。

現在の山小屋のし尿処理は･･･

大正池（上高地）の水位を調節する堤

観光地、上高地の堆砂の除去

閑散期の冬期に大規模な工事が行われている

鏡池に写る穂高連峰　（菊地氏撮影）

基調講演概要

「山の社会学」

◆日本の山岳史

- 日本山岳史の始まりは宣教師ウォルター・ウェストンの以前から
- 修験者と測量官による登山
- 佐々成政の冬の針の木峠越えは？
- 鉱物資源調査　　地下資源開発
- 木材供給　　杣人（そまびと）達が滞在した上高地
- 牧場だった上高地
- 山岳信仰と廃仏毀釈
- 版籍奉還、廃藩置県と山林の管理
  御領林、御用林、官有林、公有林、民有林
- 資源開発　　木材供給と森林鉄道（林鉄）
  電源開発による道路整備

◆山の環境問題

- ダムの功罪　　土砂の流入と排砂作業
  治水と災害防止
- 動植物の変化　　鹿の増殖と放棄された山の牧場
  猿や熊対策
- 人為的な問題　　し尿処理、し尿の空輸
  山小屋への電気供給、自然エネルギーとディーゼル燃料の空輸

【講演に出てきた主な地名等一覧】（講演時に紹介された順）
北アルプス、大町、高瀬川、上高地、立山、剣岳、白山、ザラ峠、針の木峠、平の渡し、南アルプス、四賀村、善光寺西街道、大鹿村、三伏（さんぷく）峠、鰍沢、戸隠、立山黒部アルペンルート、徳本（とくごう）峠、釜トンネル、大正池、霞沢、中房谷、黒部、宇奈月、三俣蓮華（みつまたれんげ）、焼岳、梓川、明神池、関電歩道、涸沢ヒュッテ、雷鳥沢、燕（つばくろ）岳、鏡池、双六小屋、岳沢小屋、前穂高、奥穂高

・・・さて、いくつの地名と場所、またその風景がイメージできますでしょうか？・・・

懇親会　1日目　19：00～21：00 ／ 会場 1Fレストランかたくり

担当：降旗伸子　北原瞳

進行	18:50	オープニング	キャンドルの灯火の中アカペラの歌が参加者を出迎え
	19:00	開会	
		歓迎のご挨拶	大町市長　牛越徹　氏
		乾杯	北陸信越ブロック幹事　山口博士
	19:15	歓談	～アカペラグループ　SHORT☆MANHATTAN ステージ～
	19:40	歓談	信州の映像
	20:00	アトラクション①	基調講演者菊地さんとジャンケン大会
			勝利者 6 名にはトレッキングシューズをプレゼント
		アトラクション②	牛越大町市長とジャンケン大会
			勝利者には大町スキー場のペアリフト券をプレゼント
	20:10	分科会①～⑧	代表者発表　各 1 分
	20:20	歓談	
	20:45	ジャンベセッション	～ジャンベグループサブニュマによる演奏～
	21:00	閉会	

◆地元の地酒試飲コーナー◆かんてんぱぱコーナー◆信州のお菓子コーナー
◆全国のみなさんから二次会用にいただきましたお土産コーナー

今回の懇親会のコンセプトは「ちょっとおしゃれに!」でした。全国大会のテーマにそって環境を意識しキャンドルでお出迎え。プログラムは船上のパーティをイメージしてみました。音楽はアカペラとジャンベの生演奏。当日になると、私たち実行委員が思い描いた以上会場内は盛り上がり、それは本当に船の中のようでした。静かなスタートから基調講演者菊地さん・大町市長とのジャンケンや分科会の発表で次第に盛り上がり、最後には、参加者全員が輪になって踊りました。 閉会後も楽しい余韻が冷めやらず、会場にはたくさん人が残っていました。　（降旗記）

二次会　1日目　21：30～23：30　／　会場　1F こまくさ

担当：田畑静吾　&　他長野 IYEO のスタッフ

◆内容

・内閣府上村補佐の乾杯挨拶と誕生日挨拶
・地方から持ってきていただいたお土産の紹介（日本列島　北から南の順）
・来年の全国大会の宣伝（広島 IYEO）
・ＩＹＥＯ会長大河原さんの挨拶
・諸連絡

◆良かった点

・懇親会場の立食スタイルとは趣向を変え、畳のお座敷に会場を移したため、ＩＹＥＯらしい和やかなくつろげる場所になったと思う。
・実行委員・ブロック幹事からＩＹＥＯ役員メーリングリストへ何度か呼びかけてもらったため各地方からお土産がたくさん集まった。そのため豪華な二次会になったが、費用はほとんどかからなかった。
・事前に配布される全国大会の宣伝の紙に、お土産を持ってきてくださいということを伝える場があってよかった。
・ビール・お酒とつまみの量は参加者のみなさんのお陰で充分集まり、各地の名産品を前に全国の参加者が楽しく交流できたのではないかと思う。
・片付け用のごみ袋など、用意されていて、掃除にとても助かった。
・最後に副実行委員長の樋口さんがマイクで「片づけて行ってくれると助かります」と参加者にお願いしてくれたため、みなさんが協力して下さり片づけがとてもスムーズにできた。
・本来ならば時間は 23 時までであったが、ホテルの担当者がこちらの盛り上がりを理解して３０分延長してくださったので大変有難かった。
・３次会会場を用意できたので、２次会が終わった後の導線が確保できてよかった。

◆反省点

・お土産の紹介をして頂いている時に、もっと聞いてもらえる工夫をすればよかった。
・ステージの上には、お土産を置かずに、ステージから紹介してもらうなど、メリハリをつけた方がよかった。

お土産をご持参下さいましたみなさま、そして参加して下ったみなさま、どうもありがとうございました。心より感謝申し上げます。　（田畑記）

日本青年国際交流機構表彰式

2日目　9：00～9：20　／　会場　2F信濃路

全国大会2日目に日本青年国際交流機構表彰式が行われました。平成19年度表彰者の佐藤三郎氏（静岡県青年国際交流機構・第1回青年の船参加者）、平成20年度表彰者の富樫泰介氏と武元典雅氏が出席されました。

表彰式

表彰者
（左から　佐藤三郎氏　富樫泰介氏　武元典雅氏）

平成20年度 表彰者・団体

	所　　属	氏名	参加事業他
1	北海道青年国際交流機構	富樫 泰介	S42 海外派遣（第9回）中欧班 H13 ミャンマー（第8回）団長
2	東京都青年国際交流機構	大森 充	S54 船(第13回)、 H10 ジンバブエ(第5回) 団長
3	熊本県青年国際交流機構	武元 典雅	S53 船（11回）、H4 モロッコ（第34回）渉外
4	佐賀県青年国際交流機構	下村 敏明	S56 船(15回)
5	神奈川県　都筑太鼓（団体）	白井 拡幸	地域の国際化と活性化、国際交流事業にかかわる青少年に対し長きに渡り指導・貢献

IYEO表彰は、平成16年2月29日に制定された日本青年国際交流機構規約第20条の規定及びIYEO表彰規定に基づいて行われています。

都道府県青年国際交流機構の会員又はIYEOに長年に渡り継続して協力してくださった方、もしくは団体で、以下の活動項目に当てはまり模範となる活動及び行為をされてきた方が表彰者として選ばれています。

① 地域の国際化及び活性化に資する活動
② 国際交流及び国際協力に資する活動
③ 青少年及び次世代の育成に資する活動
④ 日本青年国際交流機構の組織活性化に資する活動
⑤ 幹事会が認めた内容の活動

また、対象となる活動を2年以上継続して行われているか、短期間に大きく貢献したことも外部的評価によって明らかであることを条件としています。

帰国報告会　2日目　9：20～10：20　／　会場　2F信濃

平成19年度・平成20年度内閣府青年国際交流事業参加者による帰国報告会

担当：小林 モナ 由

報　告　者:

平成19年度第6回青少年育成社会活動コアリーダープログラム(2名)、平成19年度ドミニカ派遣(1名)、平成20年度ドミニカ派遣(1名)、平成19年度バルト3国派遣(1名)、平成20年第30回度中国派遣(1名)、平成19年度第34回東南アジア青年の船(4名)、平成19年度第20回世界青年の船(9名)

計19名

◆プログラム構成

質問形式：○×に参加者全員に壇上で分かれてもらい、○を選んだ人、×を選んだ人それぞれにその理由を司会者が問い答えてもらう。

◆ねらい

全国大会での帰国報告会では既参加者が多いのでこれまでの事業説明に近いものでなく、各参加がこの事業に関わりどのように感じたか、そしてこれからこの機会をどのように活かしていきたいかということを視点において体験談や意見を聞けるプログラムを構成。

報告者以外の参加者にとっても、若い世代の参加者が体験を通しどのような感じ方をしたのか知ってもらいたいという願いをこめた。

また、参加事業別に捉え方に違いがあるか、互いに発見があることを期待し同じ質問に回答してもらった。前日にアンケートを出し、どのような意見があるか調べた。

◆質問内容と参加者の声

① 訪問・寄港地での忘れられない体験はありましたか？
各事業参加者ともに現地での地元の方々と触れあい感じた温かさや、プログラムを通して日本を伝えられた喜びがあげられた。

② 一番記憶に残る思い出はありましたか？
熱く語られたディスカッションや宗教に対する考え方を気づかされたこと、またホームステイ体験や事業参加で生まれた“友情”など様々な意見があげられた。

③ 楽しかった思い出とは逆に事業で苦労した体験はありましたか？
語学での苦労や人間関係などがあげられた。参加者間での協調やその手段であるコミュニケーションで苦労をしながらも、新たな発見や課題を乗り越えた体験談が報告された。多言語でのコミュニケーションの難しさのみならず日本語であっても短時間にお互いを理解し合い協調することの難しさ、互いを認め合えた喜び、また現地高齢者介護現場で体感された尊重の大切さなどが報告された。

④ 事業に参加して変化したことはありましたか？
以前より積極的になれた、視野が広がった、偏見を持たなくなった、語学に対する抵抗感の克服、教育への関心、価値観の変化、　意識向上、社会貢献への関心など、様々なポジティブな変化があったことが報告された。

◆担当者所感

報告会を通して、私は報告するだけではなく更に参加者の私たち自身にお互いからの気づきもあればよいと考えました。互いの言葉の中から共通点も違いも発見できる機会づくりを心掛けました。

テーマは、気づき。事業に参加して得た気づき、そして帰国後の気づき、また体験を通しての変化を報告するとともに、私たち参加者がそれらを振り返り今後どの様に活かすことができるのか考える機会になればと願っております。

40 分という時間枠はあまりに短く、多くの参加者の声をしっかりとお伝えできなかったことを誠に残念に思い、進行の力不足を反省いたしております。

会場で温かく見守ってくださった大会参加者の皆様、そして帰国報告してくださいましたみなさんに御礼申し上げます。

（小林記）

事後活動報告会　2日目 10：05～10：35 ／ 会場 2F信濃

担当：多賀谷寿美

今回の長野全国大会では、事後活動の推進に視点をしっかりとおきたいと考え、個人・各県ＩＹＥＯの活動紹介、20 周年を迎えた世界船の記念事業の紹介をさせていただきました。

1．個人の事後活動紹介

全国大会に寄せて･･･ビデオレター

坂本達さん（第 18 回「東南アジア青年の船」参加青年・第 31 回同事業 NL）

2．各県の活動発表

①長野県青年国際交流機構　「活動のポイント」

②滋賀県青年国際交流機構　「滋賀県ＩＹＥＯ独自事業など」

③和歌山県海友会　「海友会単独事業
ＡＪオーストリア・ジャパンプロジェクト」

3．「世界青年の船」20 周年記念事業の紹介

1．個人の事後活動紹介

３年前長野ＩＹＥＯの自主事業「ワールドスタディツアー2008」というイベントで東南アジア青年の船のＯＢである坂本達さんに講演していただきました。その後、長野ＩＹＥＯのメーリングリストにも参加していただいているご縁で、個人の事後活動例としてこの全国大会に坂本達さんを紹介いたしました。残念ながら全国大会期間中に、６回目となるギニア遠征と重なってしまいましたので、参加者のみなさんへビデオメッセージをいただきました。

坂本達さん　プロフィール
第 18 回「東南アジア青年の船」参加青年・第 31 回同事業ナショナルリーダー
1968 年、東京都出身。小学校の時に見たツール・ド・フランス（世界最大の自転車レース）に魅せられ、以来、自転車の虜に。1992 年、早稲田大学卒業、同年、株式会社ミキハウス（大阪府八尾市本社）に入社。商品部、人事課を経て、1995 年 9 月～1999 年 12 月までの 4 年 3 ヶ月間、有給休暇扱いで自転車世界一周。2002 年 5 月から 12 月は自転車で日本を縦断する「夢の掛け橋プロジェクト」で 86 会場をいっきに回り講演。人事で勤務のかたわら講演活動を続け、フォトエッセイ『やった。』（三起商行刊行）の印税全額を使い、2005 年 6 月 1 日にお世話になったアフリカの村に「恩返し」の井戸完成させる。2006 年 4 月、ギニアでの「井戸掘りプロジェクト」の一部始終と、帰国後の会社勤めをしながらの活動をまとめた『ほった。』を発刊。2007 年 4 月ＮＨＫハイビジョン特集「地球と出会う 体感！エコツアー」にメインキャストで出演。現在、勤務のかたわら講演活動を続け、著書の印税でお世話になったアフリカの村などに井戸や診療所建設などを実行中。ブータン王国では幼稚園＆小学校設立を支援、2009 年完成予定！2008 年 11 月「夢 その先に見えるもの」　坂本達 ドキュメンタリーDVD 完成　文部科学省選定作品　2009 年 2 月　WOWOW ドキュメンタリー　クエスト　～探求者たち～に出演
坂本達オフィシャルサイト　http://www.mikihouse.co.jp/tatsu

～全国大会に向けて坂本達さんのビデオメッセージから～

■東南アジア青年の船に参加された思い出と経験。今の活動につながるものとは・・

一番最初に東南アジア青年の船に乗ったのが 17 年前、大学生の時でした。また、10 年ぐらい前に自転車で世界一周をスタートしたんですが、そういう活動の中で、自分は何ができるのかとか、自分にはこんなことできないとか、正直どう生きていけばいいんだろうか、いろんな経験をさせてくれた事業の人や周りの人に自分は何を返せるか、ということを思いながら事後活動をしてきました。

■坂本さんは、子供の頃からの夢として４年以上をかけ自転車世界一周されたわけですが、その後なぜその経験を各地で伝えるような活動をしようと思ったのですか？

自分に何ができるかを行動するなかで、いろんなヒントを参加者や周りの人に教えてもらいながら、自分なりに目標というか、自分にしかできないことを見つけてきたような気がします。自分ができる恩返しのようなもの、それが「伝えていくこと」かな、と感じていますので、そういうことができればと思って活動をしてきました。

特に若い人たちに、夢を持つこと、目標を持つことが、どれだけ楽しいことか、それがどれだけ物事や人を動かしていくかということを伝える活動を今、させてもらっています。全国の学校回りをしたり、母校の大学で講師を務めたりしながら、自分の経験を通じてメッセージを伝えています。

自分に何ができるかと考える中で、世界一周中に命を助けてくれたアフリカのギニアの人たちに井戸を一緒に作る恩返しプロジェクトをしました。実はこの１１月（全国大会中）にアフリカのギニアに診療所を作るプロジェクトを、来年完成させられたらと思います。また、世界一周中の出会ったブータンにも現在、幼稚園と小学校を現地の人たちと一緒に作って、いずれは図書館も作りたいという活動をしています。

それからまたいずれ、世界を周りたいという思いもありまして、一体仕事はどうするんだ、と言われますけれども、やはり目標を持つことが、自分自身にとっても、また周りの人にとっても励みになり、ビジョンを伝えていくことが、物事を動かしていくと思います。「そんなのできるわけないだろう」と口で言われなくても、そう感じるときも、まずは行動することで、考えてみたいと。考えすぎて、行動できなくなるのではなくて、まずは、自分が思いついたことをやっていきたいと思っています。

■全国大会でも環境を大会テーマにしていますが、ＮＨＫハイビジョン特集エコツアーで訪れたラオスでの経験を通じて感じられた「本当の豊かさ」とは？

2007 年の１月にラオスへ NHK のエコツアーという番組で、ロケに行ってきました。現地の昔と変わらない生活をする人たち、特に子供たちと交流する中で、一体何が豊かなことなのかなと、多分皆さんも思われたことがあると思うんですけれども、非常にシンプルな生活をしていて。例えば、日本だと洗剤とか石鹸は、台所用、手洗い用、お風呂用、洗濯用、シャンプーとかいろんな洗剤何種類もありますが、向こうは全部同じ。洗濯も含めてひとつの石鹸です。たくさん物があることよりもすごくシンプルに生きること、ついついメディアを通して物を買う、買わされるといったら語弊があるかもしれないけれど、それが豊かなことと勘違いしているような気持ちになりました。

ないものを手に入れることで豊かになれると、ずっと長い間信じてきたんですけれども、あるもので暮らす中に、豊かさがあるのではないか感じました。

それから、私たちに置き換えたら、ないものっていったら、自分にできないことを、「ない、ない、できない」という前に、自分にできることや、自分にあるもの、健康であることとか、日々笑えることとか、仲間がいることとか、そういうことを大事にしながら、身近な幸せを大切にしていくことが、まず、第一歩なのかなと。それは身近にある環境も、こういう緑も当たり前にあるものではないし、いまある自然やまわりのものを守ったり、良さを体験したり、感じることがすごく大事なことになると思います。

僕も、長野には非常に憧れがあるんですけれども、自然にもたくさんのことを教えてきてもらっていますので、自分にできる環境を守ったり、伝えたりしていこうと思います。

■今の活動の紹介と、これからの坂本さんの抱負について

現在は会社員をしています。実はミキハウスという子供服の会社で、大阪で勤務をしています。「アフリカとかアジアで、いろいろなプロジェクトをしていてすごいですね」と言われるんですけども、本当にすごいのは、僕のことを理解して応援してくれる身近な会社の人だと思います。

日々の、例えば、会社に行った時のあいさつとか、目の前にある仕事をひとつひとつきっちりすることとか、そういうことをするのが、事後活動を続けていく上で、一番大事なのかなと。やりたいことがあっても、目の前のことができなかったら、誰も信用してくれないし、仕事があることとか、社員の仲間が「お疲れ様です」と声をかけてくれることとか、そういうことに感謝することが、当たり前のことなんですけど、物事を進ませてくれるのかなと思います。

■ 全国大会参加者へのメッセージ

今回、地球人でいこう！ということで、大きいテーマを掲げられて、本当に素晴らしいと思います。例えば１００人いたら１００通りの地球人の在り方があると思いますし、あの人がこうしているから、この人がこうしているからと、比較すると自分の持ち味が出ないと思います。自分にあるものを、自分にできるものを小さいことでもいいから、つなげていく。そしてそれを、多くの人たちと手を組んでやっていくことが、地球人になっていくことではないかと思います。

船に乗った時も自分の小ささを感じ、世界一周した時も、自分の無力さをつきつけられて、その中で自分が何ができるかと思ったら、多くの人に支えられなければ、協力してもらわなければ何もできないんだということを感じました。だれかに協力してもらうためには、自分にできることを精一杯やる、それが気持ちよく助けてもらうことにもなると思います。

ＩＹＥＯは全国にこういうネットワークがあって、本当に温かい人たちがいて、僕の活動の励みにもなっています。そういう身近にあるネットワークを活用しながら、大きいビジョンに向かって、個人、個人、一人ひとりができるミッションを達成することで、素晴らしい活動の普及というものになっていくと信じています。そして私も常に頑張っていきたいと思います。

2－①　長野県青年国際交流機構　「活動ポイント」

★他団体との共同企画協力によるもの
○実行委員会をつくりＩＹＥＯが主催するイベント
●他団体への協力
■一般参加者があるイベント
□会員同士の交流

長野ＩＹＥＯは国際交流活動をしたいと思う青年が誰でも気楽に楽しく参加できる団体をめざしています。

長野ＩＹＥＯの特徴
内閣府事業の既参加青年でなくても、会員になることができ、イベント開催などをして、興味のある人が会員になっています。

これまでのおもな独自活動紹介

★アフリカンナイト（2004.8.28）180名
長野で初めてのアフリカの文化、音楽ファッションにふれるイベント

★韓流　ｉｎ　ＮＡＧＡＮＯ
韓国舞踊・韓国講座・観光ブース
内閣府国際交流事業ブース
（2006.9.10）60名

●スペシャルオリンピックス冬季世界大会へのボランティア参加
（2005.2.26～7）会員7名

●花キャンパス参加
まちの中を花で飾るイベントに協力
（2008.5.3～6）

■北欧夜話（2006.3.26）30名
北欧に関するトークイベント、文学作品の紹介など

■料理から知る各国のお国柄
料理を教えていただきながら、各国のことを知ってもらえるイベント
（ネパール、インドネシア、アメリカ、ミャンマー、）
（年に3回程度）

■各国カフェ　（年に2回程度）
各回10名程度

■ワールドスタディツアー2006
地元外国青年とのセッションと、
坂本達さんによる講演、ワールドカフェを企画　（2006.3.11）120名

■ワールドスタディカフェ
帰国報告会
地元青年との交流　ワールドカフェ
亜州奈みずほさんによる講演
（2007.3.21）90名
及川淳子さんによる講演
（2008.3.23）40名

■ミャンマーシリーズ
学習会と料理教室
（2008.6.29/7.13）

○地球のステージ
NPO 地球のステージ代表理事桑山紀彦氏による音楽と映像と語りによるｺﾝｻｰﾄ
（2008.5.10）150名

□スキー交流会
□小布施見にマラソン参加
□お花見
□忘年会・新年会

花キャンパス参加

ワールドスタディカフェ

活動ポイント

① 年間事業は総会開催に合わせ考えるが、随時できるものはやりたい人がやれるときに企画し実行する。

② イベントの大小に関わらず、イベントの責任者、担当を決め、その人たちにお任せする。できるだけ2名以上で計画、準備することが望ましいが、一人で企画、当日メンバーがお手伝いすることもある。

③ 料理教室やカフェなど、準備にそれほどかからないものをいくつか計画し、年に2回ほど学習会や少し大きめなイベントを開催し、メリハリをつけている。気楽に参加できるものと、スタッフとしてメンバーが関われるものを年間の中に配置すると、ざまざまな人が少しずつ参加できると考えている。

④ 内閣府事業既参加者のみで活動しようとすると、人数も少なく、「しなければならない」といった義務感になりがちなので、長野ＩＹＥＯでは、事業参加者でも、地元で国際交流活動をしたいと思う人にメンバーになってもらい、一緒に活動をしている。

⑤ 地元の信州大学留学生の方にもＩＹＥＯメンバーになってもらい、一緒に活動をしている。

⑥ 通常イベントは、会の負担にならないよう、参加者には参加費をとって運営する。他補助金も利用。

⑦ 会員同士の懇親会以外は、なるべく他団体との共同や、一般の方が参加となるようなものを企画し、その際に内閣府青年国際交流事業のお知らせを随時していく。

２－②　滋賀県青年国際交流機構

「滋賀県ＩＹＥＯの独自事業など」

全国大会という全国からたくさんのＩＹＥＯ会員の皆さんが集まる場で滋賀の活動を紹介できたのは、私にとっても今回参加できなかった滋賀のメンバーにとっても、とてもいい機会になりました。

私たちは特別なことはしていませんが、幸いブラジルや中国、ペルーからの日系人が多い県なのもあり自然と国際交流をできる環境にあるのはとてもありがたいことだと思います。

その特色を生かして、たくさんの県民が異文化に触れある機会として企画されたおうみ多文化交流フェスティバルに出店できたことは私たちにとっても、新たなチャレンジであり事業を知っていただく意味でも有効な場でした。

どうしても、地方のＩＹＥＯは参加後青年が都市部に去っていく為人の確保が困難ですが、問い合わせ先をかいたボード等を持って会場をあるくことにより様々な人に声を掛けて頂いたり、お話を聞いていただく良い機会でした。

グローバルフォトを使用したりすることで、既存の会員にもIYEO全体として行われていることを知る機会になったとともに、きれいな写真を飾っているブースということで様々な訪れた人の目に留まったと思います。

「事後活動」というと構えて考えがちですが、自分が出来ることからコツコツと楽しみながらも今後もイベントなども企画し息の長い事後活動を続けていきたいです。

２－③　海友会（ＩＹＥＯ和歌山支部）AJプロジェクト実行委員会

「海友会単独事業ＡＪ（オーストリア・ジャパン）プロジェクト」

１．ＡＪプロジェクト発足のきっかけ

内閣府主催の平成１７年度「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」により海友会会員２名がオーストリアに派遣され、平成１８年２月には、オーストリアをはじめイギリス、ノルウェーから１３名の青年を向かえ、青年活動分野での研修を行う。

これらの交流がきっかけとなって、本会とオーストリアの青年団体“青少年労働者運動”との間で相互派遣の話が持ち上がる。平成１９年度より相互に１０名の青年を派遣し合い、お互いの国において、青少年活動指導者としての研修や地域での交流を行うこととなる。

２．これまでの取り組みと成果

平成１８年度は、招へい準備として実行委員会を立ち上げ、１年かけて起こりうるトラブルを回避するため打ち合わせ及び広報活動をおこなった。

平成１９年８月の招へい事業は、一般家庭でのホームステイを通じ和歌山の文化や慣習の体感とともに、合宿セミナーや関連施設訪問等で和歌山の青年との意見交換や交流を通じ相互理解を深めることが出来た。

平成２０年８月の派遣事業には、９名の青年が参加し、オーストリア青年との交流を通じて、活動方法、団体運営ノウハウを学んだ。

現在、来年平成２１年度招へい事業に向け委員会を設置し進行中。現在ボランティアメンバー募集のため広報活動を行っている。

このように、相互派遣を通じ両国の親善交流・相互理解と青少年活動指導者の育成と資質向上を図るため、本事業に総力を挙げて取り組んでいる。事業の無事な遂行はもちろん、事業を組み立てていく過程でアイデアを出し合い協力し合うことにより、メンバー個々のユースリーダーとしての能力を高めていく事を目的としてる。

３．今後の主な課題

・ボランティアの確保　・協賛団体・企業の募集と資金の確保　・運営ノウハウの継承

平成２０年度オーストリア派遣事業写真

連絡先　　海友会（かいゆうかい）

〒６４０－８３１９　和歌山市手平２丁目１－２　和歌山ビッグ愛８階　　（社）青少年育成協会内

でんわ&FAX　　０７３－４３３－１２６４　または県青少年・男女共同参画課 073-441-2503

http://kaiyukai2004.hp.infoseek.co.jp/

3．「世界青年の船」20 周年記念事業

SWY20th Anniversary Commemorative Projects

◆ 背　景

2008 年 1 月に出航した内閣府青年国際交流事業の「世界青年の船」事業は、第 20 回を数えました。これを機に、「世界青年の船」既参加青年東京連絡会議での決議を受け、各国の「世界青年の船」事後活動組織（SWYAA）では、社会貢献活動を中心とした「世界青年の船」20 周年記念事業に取り組むことになりました。日本青年国際交流機構（IYEO）は、その第一弾として、第 20 回「世界青年の船」事業の出航に合わせ、その収益を環境保護に役立てることを目的としたチャリティ・イベントを企画し、実施しました。また、2008 年 1 月～2009 年 3 月にかけて「世界青年の船」事業の 20 周年を記念した様々な企画を実施しています。http://www.swyaa.org

◆ 企　画

①：第 2 回 SWYAA 国際大会　日本開催
②：「世界青年の船の森」プロジェクト
③：国際支援プロジェクト

◆ 目　的

様々な活動を通して、以下の三つの目的が達成されることを目指します。

1. 国内外の人的交流の促進とネットワーク強化
2. 地球温暖化から環境を守る活動に貢献
3. 国際社会への貢献

◆ 主催者

日本青年国際交流機構（IYEO）、「世界青年の船」事後活動組織（SWYAA）

企画①：第 2 回 SWYAA 国際大会

■ 概　要

平成 20 年 8 月 21 日～24 日日本（東京）において、第 2 回 SWYAA 国際大会（2nd SWYAA Global Assembly International Reunion）が日本青年国際交流機構、「世界青年の船」事後活動組織（SWYAA）主催で実施されました。SWYAA 国際大会共通テーマは「既参加青年の地域への貢献」、日本大会のスローガンは、Reviving SWY Spirit でした。大会には、IYEO 会員（内閣府青年国際交流事業既参加青年）を中心とした部分参加も含む 70 名近くの日本人参加者と 8 か国 13 名の外国人参加者が集いました。大会では、【持続可能な社会コース】【地域社会と青年コース】２コースに別れ「社会貢献活動」に主眼をおき活動することを特徴としました。その他、事後活動について具体的に話し合う「事後活動協議会」や「チャリティ・イベント」も実施しました。

企画②：「世界青年の船の森」プロジェクト

Ｔシャツ頒布による収益と、チャリティ・イベントを通じて集めた寄付金を使い、インドネシアのバリ島に植林し「世界青年の船の森」を育てます。植林活動は、NPO 法人アジア植林友好協会の技術協力を得て実施され、現地ではバリ州政府森林局等が森の管理に当たります。

すでに、目標額 50 万円を達成し、0.3 ヘクタール（3,000 ㎡）の森の植林が始まりました。

関連イベントとして、2008 年 1 月 24 日には「世界青年の船」事業 第 20 回記念チャリティーウォークが開催され、また 2009 年 3 月まで森の拡大に向けて様々な場面で記念Ｔシャツを頒布しています。

企画③：国際支援プロジェクト

世界各地で起きた災害に対し、1. 支援の必要性が明確である／2. 被災者の救済又は災害復興支援活動に、その国の SWYAA が取り組んでいる／3. IYEO への支援要請が公式に出されている／4. 現地での活動計

画が具体的に示されているという条件に当てはまる場合、IYEO として可能な範囲での協力・支援を行う「国際支援プロジェクト」を実施します。

サポート・ケニア・プロジェクト（プロジェクト 1）

■ 背 景

ケニアで 2007 年 12 月 27 日に行われた大統領選で、再選を果たしたキバキ大統領に対し、その結果に疑惑を持った反対派がデモを起こしました。そのデモがエスカレートして与党派と衝突し、暴動、殺戮が勃発した結果、2008 年 5 月現在の情報で約 20 万人が家を追われて避難所生活を余儀なくされ、約 1,000 人以上が殺害されました（外務省海外安全情報より）。この危機的状況に対し、「世界青年の船」ケニア事後活動組織が、国内避難民に対する人道的支援を呼びかけ、日本青年国際交流機構（IYEO）の有志が「サポート・ケニア・プロジェクト」に取り組み始めました。

「サポート・ケニア・プロジェクト」の第 1 期プロジェクトは 2008 年 3 月～5 月にかけて実施され、その実績を受け、IYEO は「世界青年の船 20 周年記念事業」の一環である「国際支援活動」の一つとして「サポート・ケニア・プロジェクト」に全国規模で取り組むこととしました。

■ 目 的

1. ケニアの現状について多くの人に伝えていき、ケニアの状況に対する理解を深めてもらう。
2. SWYAA ケニアと協力して、ケニアの国内避難民の生活安定に向けた活動を支援する。
3. ケニアの国内避難民の青少年育成活動に貢献する。
4. ケニアと日本の交流を促進する。

■ 目 標

上記の目的を達成するために、SWYAA ケニアと協力して、以下の活動を実施する。また、活動を実施するに当たり必要な費用の寄付と物資の協賛を募る。

1. ケニアの国内避難民キャンプで必要とされている衛生用品等の寄付
2. ケニアにおける青少年育成活動の実施

スリランカ就学支援プロジェクト（プロジェクト 2）

笑顔の輪を広げよう　～子どもたちに夢を届けよう～

■ 背 景

2004 年 12 月にスマトラ沖で発生した津波の被害を受けたスリランカに対し、IYEO は、SWYAA スリランカを通じて、US$3,000 の寄付を行いました。これをきっかけとし、SWYAA スリランカは、2005 年に「One More Child Goes to School（スリランカ就学支援プロジェクト）」を開始しました。さらに、2008 年 3 月に実施された「世界青年の船」既参加青年東京連絡会議では、このプロジェクトを世界中の SWYAA で支援し、発展させていくことについて話し合い、日本でもプロジェクト・チームが結成されました。

■ 活動内容

学校に通うことが困難な子どもたちへ、ペアレンツ（ドナー）が奨学金を贈るプロジェクトです。スリランカには、家族の問題や金銭的な問題で就学が困難となる多くの子どもたちがおり、特に 5 歳から 12 歳の子どもたちに学校教育の継続の機会を与えることが必要とされています。現在は SWYAA スリランカが中心となり、4 つの学区でこのプロジェクトを実施しています。各学区にプロジェクト・コーディネーターを配置し、彼らが子どもたちの詳細情報を基に学校等を訪問して、低所得層の子どもたちの中から奨学金を受取る対象者を選抜します。また、子どもたちの成長報告が SWYAA スリランカを通じて 3 か月毎にドナーに送られます。

スリランカでは、このプロジェクトが始まり 2 年が経過していますが、現在では約 100 人が奨学金を受け取り、学校に通い学習を続けることが可能となりました。

日本では、奨学金を贈る活動を目標とし、イベント（チャリティー・ランチ、料理教室、語学教室、スリランカ勉強会等）を随時企画し、文房具・学用品等の提供をしています。

参加者交流会　2日目 10：35～11：10 ／ 会場　2F信濃路

担当　樋口敦子

◆ 内　容

・ 知らない人同士で手をつなぎ、５人そろったとろでグループをつくる。
・ 自己紹介
・ 事後活動報告を聞き、これから地元に帰ってやりたいと思ったこと、２日間の全国大会を通じて感じたことなどを自由に語る。

人はインプットだけだと疲れる。アウトプットが同じだけ必要とのこと。そこで大会は受身にならず、参加型にしたいという考えのもと、少しでもひとりひとりが発信できる「場」としてこの参加者交流会を企画しました。そして、世代・地域・参加事業を超えた交流も目的としました。

また、この参加者交流会が和やかにできるように二日目の会場を畳の大広間としました。時間は充分ではなかったかもしれませんが、各グループ５名がそれぞれ発言し、共感したり刺激をうけたようです。

参加者のみなさんは何を語り、どのようなことを心に刻んだでしょうか。ここで話したことが今後の活動につながれば幸いです。　（樋口記）

閉会式　2日目　11：10～11：30　／　会場　2F信濃路

司会：副実行委員長　福永理和

1.	開会の言葉	長野県青年国際交流機構　会長	樋口敦子
2.	あいさつ	内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付参事官(国際担当)	田中愛智朗
		日本青年国際交流機構　副会長	上杉聖次
3.	大会旗引継ぎ	長野大会実行委員会から広島大会実行委員会へ	
4.	次期開催県挨拶		
5.	閉会の言葉	第24回全国大会長野大会　実行委員長	田口敏子

内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付
参事官(国際担当)　田中愛智朗

日本青年国際交流機構副会長 上杉聖次

長野から広島へ大会旗を引き継ぎました。

チャーターバス東京便～善光寺宿坊の精進料理&そばの昼食付～

担当：福永理和、日向野美峯、輿あずさ、田畑静吾、日向恒人

◇ 費　用（一人当たり）　往復 10,000 円　行きのみ 5000 円　帰りのみ 6500 円
◇ Time Schedule
平成 20 年 11 月 29 日（土）
東京　7:30 ＪＲ東京駅八重洲口 → 12:30 立山プリンスホテル
平成 20 年 11 月 30 日（日）
12:00 ホテル → 13:10 長野・善光寺 → 15:00 長野 IC → 19:30 東京駅
◇ 乗車人数　36 名

船の出港のような見送りにて東京の途へ

善光寺本堂

精進料理＠兄部坊

善光寺：『善光寺縁起』によれば、御本尊の一光三尊阿弥陀如来様は、インドから朝鮮半島百済国へとお渡りになり、欽明天皇十三年（５５２年）、仏教伝来の折りに百済から日本へ伝えられた日本最古の仏像といわれております。この仏像は、廃仏派の物部氏によって難波の堀江へと打ち捨てられました。後に、信濃国司の従者として都に上った本田善光が信濃の国へとお連れし、皇極天皇元年（６４２年）現在の地に遷座いたしました。皇極天皇三年（６４４年）には勅願により伽藍が造営され、本田善光の名を取って「善光寺」と名付けられました。尚、平成21年春は、7年に一度のご開帳が開催されます。

出典：善光寺ホームページ　http://www.zenkoji.jp/about/index.html

担当者の感想

行きも帰りも、ほぼ時間どおりに問題もなく目的地へ到着することができました。

行きは、快晴で空気も澄んでいたので、冬にはあまり見ることができない北アルプスを、バスの中から、満喫することができました。

帰りは、長野市までの道中、雪が降り、さすが「長野」と感じました。雪化粧の景色も堪能することができました。

長野市では、善光寺赤門寺　永代宿坊　兄部坊（このこんぼう）さんにて、精進料理を頂き、その後、善光寺を参拝しました。

皆さんも、もう一度長野に足を運んできてください。　（日向記）

大会記録

当日資料とお土産（協賛品）

実行委員長よりみなさんにプレゼントされた大会テーマ入り大会記念品　（リサイクル風呂敷）

大会報道資料

信濃毎日新聞 平成20年11月30日朝刊

植樹式は長野トヨペット（長野市）が、車の出す二酸化炭素を吸収してくれる森づくりの一環で開いた。

国際交流事業のOB 大町市内で全国大会

「青年の船」などの国際交流事業に参加したOBらによる全国大会が二十九日、二日間の日程で大町市内で始まった。内閣府や県青年国際交流機構（長野市）などが主催し約二百人が参加。初日は環境問題をテーマに分科会をした。

開会式で内閣府の松田敏明政策統括官は、国の青年国際交流事業が今年で五十年目を迎えたと紹介。「交流事業の経験を財産にして、仕事や地域活動で活躍してほしい」と激励した。

出席者は市内の博物館など八会場での分科会に参加。大町エネルギー博物館では、まきをたいて走るバス「もくちゃん」に試乗し、車体後部の炉から煙を上げて走る様子に興味深そうだった。

三十日は長野、滋賀、和歌山各県の代表者らが日ごろ取り組んでいる国際交流活動を報告する。

まきバス「もくちゃん」について説明を聞く参加者ら

大糸タイムス平成20年11月30日朝刊

大糸タイムス　平成20年（2008年）11月30日（日曜日）（日刊）

地域の"エコ"触れる

大町で国際交流フォーラム

内閣府（長野県・総務庁）青年国際交流事業50周年記念、青少年国際交流事業事後活動推進大会・日本青年国際交流機構第24回全国大会・第15回青少年国際交流全国大会フォーラム長野大会は29、30の両日、大町市の立山プリンスホテルで開いている。全国から国際交流経験者約200人が集い、「地球人で行こう！信州から見つめる明日のEARTH」をテーマに、地域の環境活動に触れた。

初日は環境をテーマに、8つの分科会に分かれて大町での身近な環境活動を見学。分科会では、NPO「森づくり人づくり22」による森林再生の活動や、まきバス「もくちゃん」によるエコツアーなどの活動が紹介され、さまざまな形で地元の取り組みに触れた。

同フォーラムは、内閣府や地方公共団体が青少年を国外に派遣する「世界青年の船」などの交流事業経験者が集まり、事後活動の報告や意見交換などで、国際交流活動を広める目的で開いている。県内にも同事業の経験者が多く、環境活動が盛んな地域として会場となった。

山岳ジャーナリストの菊地俊朗氏が「山の社会学」をテーマに講演した。2日目は事業参加者の帰国報告会などを行う。

参加者にはリユース（再使用）などの取り組みを訴える「もったいないふろしき」が配られた。田口敏子・実行委員長は「環境というテーマを日本の真ん中の山中で考えようと計画した。ふろしきに思いを込め、心あたたまる長野大会としたい」と話した。

まきバス「もくちゃん」を見学する参加者

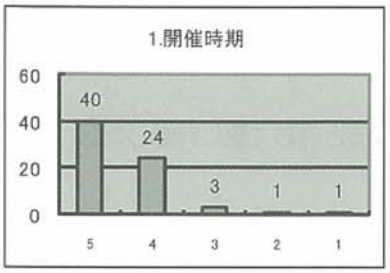
大糸タイムス
OHITO TIMES
発行所 ©大糸タイムス社
〒398-0002 長野県大町市俵町1851
TEL 0261(22)2110(代) FAX 0261(22)2111
購読料1カ月1,700円(消費税込) 1部 80円
ホームページ：http://www.ohitotimes.co.jp/

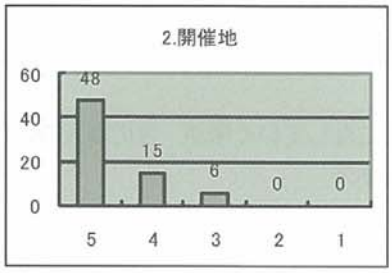
時計・メガネ・宝石
時明堂
大町市九日町
☎(22)0468
(駐車場有り)

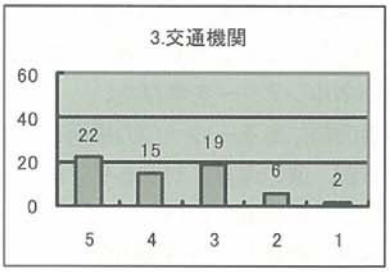
本紙購読申込所

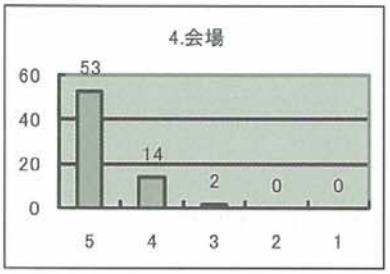
参加者アンケート

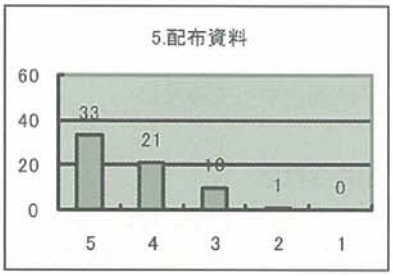
1．大会評価グラフ ［評価数値： 5（高）←3（中）→1（低）］

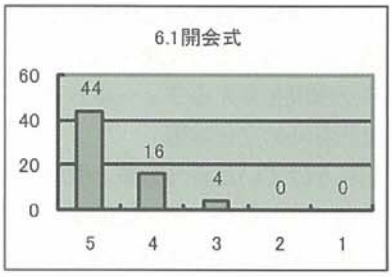


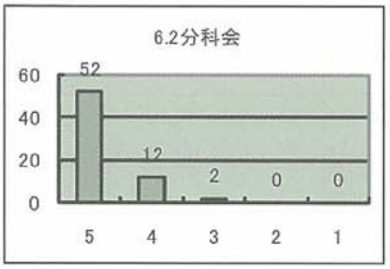


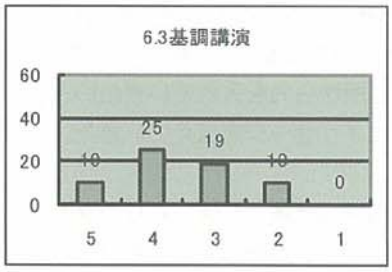


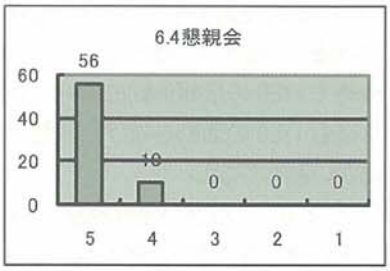


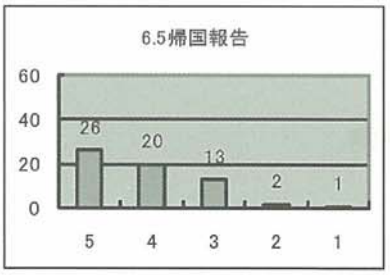


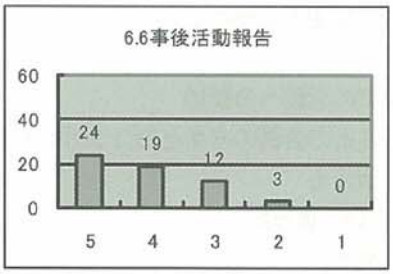


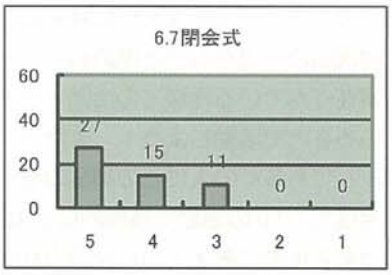


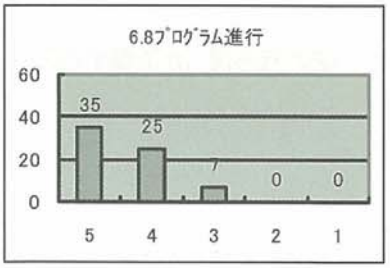


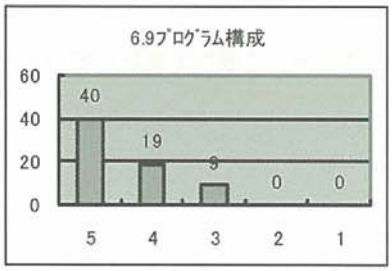


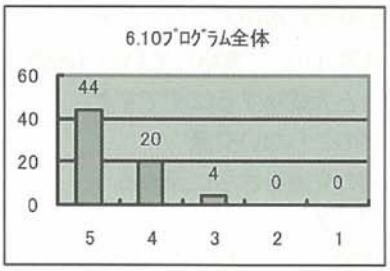


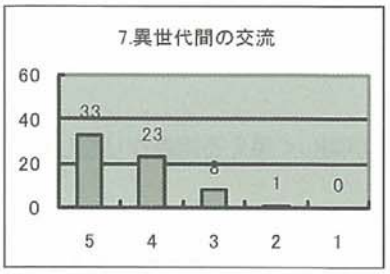












（単位：人）

2．質問項目　この大会に参加して今後何かやりたい、実践したいと思ったことはありますか？

・事後活動に参加したいと思った
・積極的に様々な活動に参加したいと思った
・パネルシアターを学びたい
・目の前にある一つ一つの事柄を誠実にこなしていく事が、世の為人の為になると信じて更に行動したい
・本部、県の運営に対するリフレッシュネス
・同窓会を開催したい
・活動の継続と、寄港国訪問
・エコの活動をもう少し活発にしたい
・他県と協力しての交流イベント
・自然環境を考えるフィールドワークを子供達とやってみたい
・全国各地の文化学習
・忘れかけていた自分の夢、信念を思い出させた
・地道ではあるが、地元に国際交流の楽しさを広められるプログラム、ヒントをいっぱい頂いた
・地元の IYEO でいろいろな活動（受入、ブロック大会等以外で独自のもの）をしたい
・他の県との交流の中で、相互の活動を共有できたので、学んだことを活かしたい
・結婚後、活動できなかったため、地元で新たに受入やいろんな活動に関っていけたらと思う
・改めて IYEO の広報活動に自分の身近な所から力を入れていきたいと思った
・今後も IYEO の活動を続け、仲間と共にメッセージを伝えていきたい
・温かいおもてなし
・地元 IYEO での全国大会の報告、自主事業の実施、基盤づくりの見直し
・今後も色々な方面へ出向いて、より深く IYEO と関っていきたいと思った
・このままの地球を次世代に残すための環境活動を続けたい
・世代間の交流をもっと進める
・現在住んでいる地域での活動＋出身地での活動への参加
・ふるさとで活動しよう！　またはふるさとの会員の方々とのコラボでの活動等
・少しでも多くの人にこの事業の成果を伝える
・今後も IYEO の活動に積極的に参加したいと思った
・事業参加前に考えていた企画の具体的実行
・継続的に取組んでいくこと
・東京 IYEO で実施している「英語で話さナイト」を長野で実施してもらいたい（あれ程外国人が活躍するので、きっと大成功するはずですよ）
・肩のこらない交流
・縦の交流をさらに深める
・ダンス
・長野 IYEO は決して大きな会ではないと思うが、バイタリティとホスピタリティをすごく感じたので、地元に戻ってそれを伝えたい
・蕎麦、おやきのような地域文化を身につけて発信できるようにする
・アクティブに何事にも挑戦していきたい
・若い方々から沢山の参加があり、とても楽しかったとの感想から、若い方々が楽しく思える組織作りをしたい
・地元で頑張ってみようとおもった
・バリの補修校へ遊具を贈りたい

【他の質問事項への回答一覧は、長野 IYEO のホームページ http://naganoiyeo.com/にてご覧いただけます】

参加者からのことば

長野大会から学んだこと　～全国大会のあるべき姿～

東京都青年国際交流機構会長　國分由佳

会場が暗くなり、♪It's a small world　のBGMで世界中の子どもたちが交流するパネルシアターで幕開けした長野全国大会。初めてみるパネルシアター、ほんわかした雰囲気、次は何がおこるんだろうというワクワクドキドキ感！この興奮が大会終了まで続きました。

老若男女、留学生も含んだ実行委員は年齢、男女比ともバランスがとれ、それぞれの得意分野を生かし適材適所で活躍、司会も皆少し笑いをとりながら上手！各人の長所、持ち味がでていました。各会場入り口には、長野そば茶やりんご、ゼリー、おやきなど特産品がおいてあり、おもてなしの心が感じられました。また、協賛のお土産もたくさん！プログラム内容もよく練られ、さりげないところにまで細かい工夫が凝らされ、参加者が気持ちよく楽しめました。

実行委員の皆様、本当にありがとうございました。

今回の長野大会では、今までと違う‘新しい試み’がありましたので、その点について報告します。

◆懇親会

天井の高いガラス窓の大きな開放的なレストラン、幻想的なキャンドルの明かりの中、アカペラソングを聞きながら参加者は入場。懇親会のオープニングは和太鼓や地元の踊りが多い中、今回は洋風なおしゃれな雰囲気でした。また、最後はアフリカン太鼓グループの演奏。太鼓の響き、大地から得るエネルギーを感じ、参加者は自然にリズムをとりはじめ、♪線路は続くよ で全員が一つの輪になりました。まるで船のパーティの再現！会場全体が一体化し、あー、ＩＹＥＯっていいな！と思った瞬間でした。

◆二次会

参加者が全国各地の名産品を持参、豪華な二次会となりました。珍しい食べ物がいっぱい！名産品から話題が広がり、美味しいものを食べながら、心もお腹も満足しました。

◆事業報告会

例年全国大会での事業報告会は、事業参加直近の青年が、事業内容や感想をとうとうと報告します。今回は、最近事業参加した人のYes/NOクイズとインタビューで報告会は短時間で切り上げ、新たに各県のＩＹＥＯ活動紹介をしました（長野県、滋賀県、和歌山県）。その後、5人ずつのグループにわかれ、自己紹介後、事後活動について話しました。私のグループでは、三重県、熊本県の女性が「今まで受入れしかやっていなかったけど今日の話を聞いて何か自主企画をやってみようと思った」と話していました。各県の活動状況を知り、刺激を受けたことは大きな収穫です。

◆チャーターバスの運行

今回、長野―東京往復のチャーターバスが出ました。参加者を一人でも多くすること、交通費がお得であることに加え、受付を一度に済ませられる上、最後までプログラム参加してもらえるというメリットがあります。

今回の長野大会は、全国大会のあるべき原点＝「全国大会は事後活動について考える会である」に返ったような気がします。全国大会は「仲間との再会を喜ぶ場だけではなく、活動の刺激を受ける場」であるべきです。

長野の全国大会では、一日目は楽しく盛り上がり、二日目はまじめに事後活動について考える時間を作り、ＩＹＥＯらしさを失わずに、真剣な話をするスタイルを確立しました。

長野全国大会は大成功でした。楽しかったね！で終わらせず、良かった点を今後も踏襲していきたいものです。

長野大会のコンセプトなど

長野全国大会開催の決定後、実行委員会では、事後活動の推進のための大会になることと、長野・信州らしさとは何かを考えながら、参加者みなさんにどうやったら喜んでいただける大会になるか、次のことに視点をおき大会運営をしました。また、開催一年前の代表者会議およびブロック交流会にて、長野大会に向けてみなさんから要望を受け、プログラム内容などに反映させました。

◆大会の内容について

・ 大会全体のコンセプトを「環境」に据えて実施したい
　→ 大会テーマ、分科会、懇親会など、信州の自然などにふれる内容を全体プログラムに反映
・ 大会全体が統一感のあるものにしたい
　→ 各プログラムそれぞれがの内容が大会のテーマに沿うようにした
・ 基調講演だけでも、聞いてよかったと思ってもらえるものを考えたい
　→ 信州、長野の自然に関係している方を選出
・ 大会は参加型のプログラムを多く取り入れたい
　→ 分科会を少人数にして、ワークショップ形式に
・ 懇親会は参加者全員が楽しめるよう、船上のパーティーのようにしたい
　→ キャンドルでお迎え。生演奏。料理の量が充分となるよう開催ホテルに依頼
・ 事業参加したばかりの人たちにも大勢大会に参加してもらいたい
　→ 19年度、20年度事業参加者による全員参加型の帰国報告会を企画
・ 全国大会に参加した人が、お土産となるものを持って帰ることができるようにしたい
　→ 個人・県・事業による事後活動報告会を企画
・ 参加者同士が世代を越えて、新しく知り合いになれるような企画を考える
　→ 参加者交流会の実施
・ お金をかけないでできる企画・内容をつくりたい
　→ 参加者のみなさんに地元の名産品などを持参してもらい、二次会を設営
・ 参加しやすい交通手段を準備したい
　→ 東京・名古屋・大阪京都チャーターバスツアーを企画。ホテル送迎バスも用意
・ 家族でも参加できるような仕掛けを考える
　→ 家族、友人同士が一部屋に予約でき、直前になっても融通・調整の利くホテルを選出
・ 若い人たちに多く参加してもらえるよう参加費用を安くしたい
　→ 宿泊場所の検討。コストが掛かるパンフレットは、印刷してホチキス留めとし、
　　お土産、記念品は協賛にて対応。ネームカードなどは、自分で書いてもらった
・ ゆったりとしたアットホームな雰囲気の時間も用意したい
　→ 車座で話すことができる和室と温泉のある施設を選出
・ 地元の食材でもてなしたい
　→ ウエルカムおやきと地元産のりんごジュースコーナーを設置。地元のお菓子とお茶などのコーナー設置
・ 地元の外国青年も参加できるような大会にしたい
　→ 毎年長野IYEOが行っているワールドカフェをひとつの分科会にし、留学生5名が参加

◆実行委員について

・ 大会に併せて県内外のＩＹＥＯメンバーにかかわってもらいたい
　→ 県内が広いため、実行委員会開催を長野市、松本市、大町市各地でおこなった。首都圏在住の県内出身メンバーにも大会の協力を依頼した
・ 実行委員も楽しめるような大会にしたい
　→ 手間のかかるようなことを極力省き、当日のスタッフの作業を少なくし、地元の方々の協力を得て、スタッフも参加者とともに交流できるようこころがけた

大会までの流れ

日にち	内　容
平成19年	
10／5	打ち合わせ会(長野市)　実行委員会組織体制・日程の決定。会場の選定。「環境」を中心に自然・共生社会等現代社会と長野県から発信できることを大会のテーマにすることが決まる
12／1～2	愛知全国大会にて長野大会ＰＲ 実行委員長挨拶 代表者会議にて実行委員長挨拶　長野大会に向けて会議参加者にアンケート
平成20年	
1／26～27	ブロック大会（野沢温泉）大会に向けて要望をまとめる
2／16～17	決起大会（大町市※）基調講演者のリストアップ　　大会の全体構成案の検討等
3／1～2	全国代表者会議　日程、会場（候補）などを報告
3／14	打ち合わせ会（松本市）基調講演者菊地氏が候補としてあがる。チャーターバス運行・スケジュール検討
4／18	大橋事務局長、田口実行委員長、山口ブロック幹事らで長野県・開催市大町市に挨拶
4／19	第1回実行委員会（大町市※）大会の概要説明　意義等を大橋事務局長から受ける
6／6	第2回実行委員会（長野市）　　大会テーマ、サブタイトルの検討　分科会の検討
6／2	基調講演者菊地さんに正式に講演依頼をする（実行委員長・長野 IYEO 会長）
6／15	長野スタッフにて打ち合わせ会　メンバーにてスタッフにて大会テーマ「地球人で行こう！～信州から見つめる明日のＥＲＡＴＨ～」があがる。日程の全体構成　分科会の検討
7／6	第3回実行委員会（松本市）大会テーマ決定。8分科会が決定。各プログラム担当者決定
8／23～24	第4回実行委員会（大町市）　　大会概要が決定。参加申込用紙の校正。広報計画、記念品の検討 事後活動報告・参加者交流会内容についての協議
9上旬	大会開催申込書、チャーターバス等アクセスのご案内発送
9月～11月	分科会担当者、現地調査。打ち合わせ
9／8	個人の事後活動報告者、坂本達さんのインタビュー
9／23	第5回実行委員会（長野市）　　懇親会の内容協議。各プログラムの検討　記念品の決定
10／25	基調講演者菊地さんと北アルプス絶景ポイントをトレッキング。 大町山岳博物館にて山岳のお話もいただく　（実行委員会メンバー）その後担当者開催会場の視察
11／14	第6回実行委員会(松本市)　各プログラム詳細確定。スタッフの大会当日スケジュール確認
11／19	参加決定者に事前資料送付
11／21	第7回実行委員会　当日のスタッフスケジュール最終確認
11／28	大会プログラム印刷
11／29～30	大会当日
12／13	打ち上げ反省会第一弾①(大町市※)　報告書の打ち合わせ
12／21	打ち上げ反省会第二弾(長野市)

基調講演者菊地さんと

※大会会場:立山プリンスホテル

決起大会打ち合わせ　2月16日

第1回実行委員会　4月19日

第4回実行委員会　8月23日

ご協賛いただいた会社・商品のご紹介

○ 会　社　名	○ 商　　品
伊那食品工業　株式会社	寒天スープ（海草から生まれたエコフィルム）
株式会社　八幡屋磯五郎	善光寺七味
株式会社　シューマート	トレッキングシューズ
山本食品　株式会社	信州そば
アルプスウォーター　株式会社	水
サントリー株式会社長野支店	スパークリングワイン　むぎ焼酎　八重丸
株式会社　松葉屋本店	日本酒　純米吟醸　北信流
株式会社　市野屋商店	日本酒　金蘭黒部
株式会社　薄井商店	日本酒　白馬錦
株式会社　北安醸造	日本酒　北安大國
株式会社　大雪渓酒造	日本酒　大雪渓
株式会社　福源酒造	日本酒　福源
オリオンビール株式会社	沖縄ビール

○有志のみなさまからのご協賛品

風呂敷

きのこ

りんご

そば茶

雷鳥の里（菓子）

ワイン

ご協賛どうもありがとうございました。

スタッフ名簿

長野大会実行委員

		主な担当
◎実行委員長	田口 敏子	基調講演　渉外 協賛
○副実行委員長	福永 理和	分科会4　開会式　閉会式　アクセス　報告書
○副実行委員長	樋口 敦子	登録　渉外 参加者交流会　協賛　報告書
実行委員	岩田 和子	受付　開会式　分科会2
	ｳｨﾅｰﾀﾞｰ ｳｪﾝｳｨﾘｶﾊﾞﾝ	分科会5　懇親会
	江守 雅美	受付　開会式　分科会5
	ｴﾙﾃﾞﾈｰ ﾂｪﾝﾃﾞｽﾚﾝ	分科会5　懇親会
	春日 真美子	受付
	北原 瞳	分科会7　懇親会
	小林 モナ　由	分科会1　帰国報告会
	輿 あずさ	分科会1　二次会
	小林 昭子	実行委員長補佐　基調講演　おもてなし
	小山 美弥子	受付
	坂口　麻里	受付
	塩入 多美子	受付　資料作成　報告書
	多賀谷 寿美	分科会3　事後活動報告会
	滝澤 由佳子	受付　帰国報告会
	田畑 静吾	受付　二次会　チャーターバス東京便
	竹内 若菜	受付
	日向 恒人	チャーター東京便　二次会
	日向野 美峯	チャーター東京便　分科会8
	降旗 伸子	開会式（パネルシアター）　懇親会　分科会6
	ヘイン ウッティ	分科会5　懇親会
	水内 妙子	受付総括
	三澤 智恵	分科会6　開会式　スタッフスケジュール
	ミョータンティ	分科会5　懇親会
	宮崎 治夫	受付
	宮崎 愛子	受付　おもてなし
	矢口 稔	分科会7　記録　協賛
	山口 登志恵	分科会8
	山浦 和徳	記録　プロジェクター
	山本 仁美	受付　開会式　分科会2
	ロベーナ	分科会5　懇親会

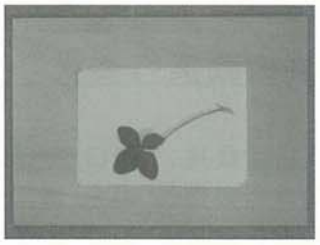
北陸信越ブロック

○ ブロック幹事	山口博士
福井県	増永淳子　　小林仁志
富山県	日南田美幸　　鈴木信二
新潟県	間嶋裕樹　藤巻洋生　大塚葉月　三浦寿子　小川希
石川県	千代弥生子　　岡田由美　木元満里

あとがき

～人と人とのつながりから～

長野県青年国際交流機構　会長
長野大会実行委員会　副実行委員長　樋口敦子



大会の約 2 ヶ月前、歩きながら大きな２つの四葉のクローバを見つけました。ひとつは、大町市役所の駐車場、もうひとつは今回の大会ロゴとなっている表紙デザイン描かれている齋藤清先生の自宅近くの道端。最初のものは、ちょうど推進センター・ＩＹＥＯ事務所の窓口を担当をしている田中佐代子さんと電話を話をしている最中でした。これは大会が成功する何かのメッセージかな？と幸せな気持ちになり、ひとつは田中さん、もうひとつは齋藤先生にプレゼントしました。

齋藤先生は、もともと田口実行委員長の友人で、開催地の大町温泉郷にお住まいのため分科会の講師をお受けいただいたのですが、齋藤先生のお宅に打ち合わせに伺ったところ、「大町には環境関係で頑張っている山内さんという女性がいるから紹介するよ」と言われました。山内さんはお会いするととても素敵な女性で、自分自身はブナの木の分科会を引き受けてくださり、さらにバードコール、キャンドルの分科会も後に紹介していただけることになりました。

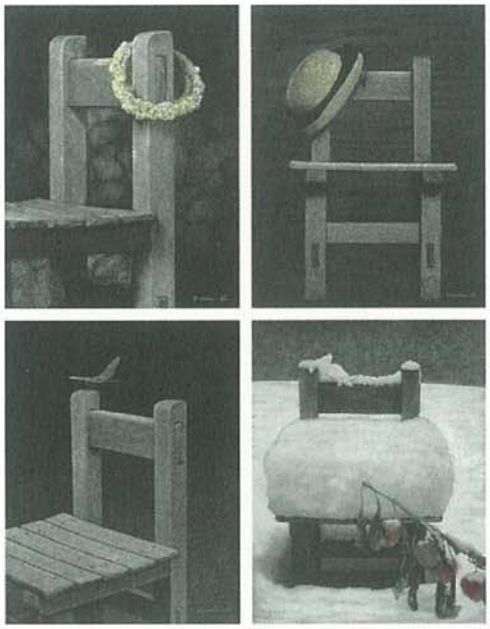
基調講演者も実行委員長の推薦。今回、あらためて思うことは、人と人とのつながりがいかに大事か。そして、直接お会いして、話して、交流することの大切さです。全国大会がこのように毎年行われるのも、全国で活動しているＩＹＥＯ会員が、顔を合わせ、ひとつの空間でなにかを一緒に体感、経験できるからではないでしょうか。

また、この大会が無事に終えることができたのは、影の立役者である大会会場の担当者、花井さんのおかげです。私たち実行委員会からの数々の無理なお願いをすべて快く対応してくださいました。他にも感謝したい人がたくさんいすぎてこの誌面ではとても書ききれません。

今回の大会は、心の豊かさを問いながら、１日目は人のふれあいを通じて長野・信州の自然や風土を存分に味わっていただき、２日目は事後活動推進のため、これから何かをしたいと思っていただけるようなプログラム構成をいたしました。

みなさん、長野大会はいかがだったでしょうか。会場を去るみなさんの笑顔を私たちは忘れません。参加いただいたみなさん、どうもありがとうございました。

そしてこの大会に関係するすべてのみなさまに心より感謝申し上げます。

発 行 者
日本青年国際交流機構
第 24 回全国大会
長野大会実行委員会
実行委員長　田口敏子
平成 21 年 3 月発行

表紙・裏表紙画　齋藤清先生